みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

奄美大島北部, 笠利湾における貝類知識：エリシテーション・データをとおした人自然関係の記述

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2010-07-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 飯田, 卓, 名和, 純
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4109

奄美大島北部，笠利湾における貝類知識

——エリシテーション・データをとおした人-自然関係の記述——

飯田　卓・名和　純

『国立歴史民俗博物館研究報告』第 123 集, 153－183 頁
［共同研究］環境利用システムの多様性と生活世界
(2005 年 3 月発行)

奄美大島北部，笠利湾における貝類知識

エリシテーション・データをとおした人–自然関係の記述

Knowledge of Shellfish on the Coast of Kasari Bay, Northern Amami Island

飯田 卓・名和 純

はじめに
❶研究の背景
❷方法
❸結果1　喜瀬在住の60代女性2名における貝類知識
❹結果2　他のインフォーマント3名による追加情報
❺考察
❻結論

[論文要旨]

民俗の変容が叫ばれ始めた高度成長期を境として，日本各地の暮らしはさまざまな局面において変化してきた。とくに，人びとの生活と自然との関わりは，国土利用の大幅な改変のため，現在も激しい変化にさらされている。本稿では，とくに改変の著しい干潟と人の関わりの実態を報告するため，人びとの貝類知識の記載を試みた。

また，記載された貝類知識の分析において，核心的な知識と周辺的な知識という対概念を提示した。前者は，①身近な自然景観を舞台として，②さまざまな活動に継続的かつ反復的にたずさわるなかで，③直接的な経験として得られる知識である。このため，核心的知識は，地域の自然環境と社会的交渉を反映する。いっぽう周辺的知識は，まれに訪れる土地での観察のほか，知人からの伝聞や，出版・放送をはじめとするマスメディアなど，さまざまな回路を通じて獲得される。こうした知識は，地域社会の内部で共有されることが少なく，個人的な関心に沿って深められる性質のものである。これまでの民俗知識の記載においては，両者が区別されることはあまりなかったため，民俗語彙の羅列に終わることが少なくなかった。しかし，こうした知識の重層性に留意するなら，具体的な人と自然の関わりを同時に提示することもできよう。

干潟の生物に関する実態報告は，消滅の危機にある民俗を文字記録にとどめるだけでなく，今後の干潟利用のあり方を検討するための材料を提供する点で大きな社会的意義をもつ。しかし，水陸両域にまたがる干潟の研究には特有の制約が多く，方法論的な課題を抱えている。本研究で用いたのは，生物標本を提示しながら聞き込みを進めるというエリシテーション法である。この方法論は，制約の多い干潟生業研究において，少なからぬ成果をもたらすと期待できる。

はじめに

本稿は，貝類に関して人びとがもつ知識の記述をとおして，人びとの生活と海との関わりを描写する試みである。

もちろん記述というものは，いかなる場合においても，記述者によって再構成された表象でしかありえない。人びとの生活と海との関わりをありのままに紙面に再現することなど，できるはずもないのである。それにもかかわらず，たとえ近似的なものであれ，人びとの活動を描写する試みはますます重要になっている。

その理由のひとつは，音響映像化ないし文字化しにくい知識や技能が世界的規模で急速に失われつつあることによる。これまで，知識や技能の大部分は，対面的なコミュニケーションによって伝承されてきた。しかし，各種コミュニケーション手段や交通の発達によって，対面的な伝承の役割は低下し，同時に，対面的でなければ伝承されにくいことがら(身体技法など)が伝達されなくなった。こうした時代にあって，各種コミュニケーション手段が見すごしてきた生活者の証言をあらためて取り上げることは，コミュニケーションの欠落を補完する意味をもつ［cf. 篠原 1994：4，276］[1]。

ふたつめの理由として，知識や技能を運用する場が大きく変化しつつある場合，知識や技能の記述そのものが変化の方向性を制御しうるということがあげられる。たとえば高度成長期以後の日本社会では，土木工事技術の空前の発達により，国土全体における土地利用が大幅な見直しを受けた。その結果，多くの場所で景観が大規模に改変され，旧来の知識や技能を運用する場としては存続しなくなっている［山下 1989］。当事者による合意がある場合には，それも仕方あるまい。しかし，経済的な評価が難しい各種社会活動（レクリエーションを含む）がおこなわれる場に関しては，当事者にとっての重要性が認識されないままに土地改変が進むこともしばしば生じる。そうしたなかで，土地改変事業の対象となりやすい地域における人びとと自然の関わりを報告することは，事業計画の進め方（場合によっては計画の可否）を議論するうえでかけがえのない材料となりうるのである［cf. 武田ら 1998；李／武田 1999］。

本稿でとりあげる貝類の多くが生息するのは，歩いて渡れるような浅い海である。潮汐作用によって海になったり陸になったりする曖昧な移行帯，すなわちエコトーンと呼んでもよい［秋道 2001］。そこでは海と陸の境界線が幅をもち，ときに数百メートルにもわたることも珍しくない。生態系区分としては，本稿にも登場する干潟やサンゴ礁地形のほか，マングローブ林など，生物体量（バイオマス）や生物多様性のきわめて高い環境を含む［加藤 1999］。こうしたエコトーンの豊かな生物資源を求めて，人間たちもまた，活発な活動を展開してきた。ところが埋め立て技術の発達は，全国的規模でエコトーンを陸地に転換し，地図どおり幅のない線で海陸を区切る結果をもたらしている。

エコトーン減少のスピードに比べると，それと関わる人びとについての研究の蓄積はまだまだ少ない[2]。本稿は，奄美大島北部の笠利湾近辺において貝類標本を用いながらおこなった聞き込み調査（エリシテーション）の報告である。本稿ではまず，調査地と調査方法について概略を述べながら，問題の所在を明らかにする。そして，調査地における貝類知識の現状を，個人的偏差をそこなわな

いかたちで提示したい。最後に，生態人類学的な見地から，緊急を要するこの分野の研究について今後の展望を示す。

❶……研究の背景

調査地

笠利湾は，奄美群島の主島・奄美大島の北東部に位置する広大な湾で，東側の笠利町と西側の龍郷町という2つの行政区にまたがっている（図1）。海岸線は，起伏の多い島の地形を反映し，複雑に湾入している。その湾奥部では，おだやかな潮流と山側から注ぐ小河川の堆積作用によって，内湾干潟[3]が形成されてきた。笠利町側では，手花部と喜瀬という2つの集落が，湾奥部の干潟に面している。とくに手花部干潟は，生きている化石といわれる腕足類・ミドリシャミセンガイの産地として名高く，貴重な干潟環境であると認識されてきた［加藤 2002］。ただし，干潟の底質や生物相はけっして均一ではない。一般には湾奥から湾口にかけて底質の粒子が大きくなるため，それぞれの無機的環境に応じて異なる生物相が干潟内部で成立しているとみることができる。

笠利町は，島のなかでは起伏が比較的ゆるやかで，陸路での移動も古来より可能であった。これに対して島の南西部では，後背地が険しく，地続きの隣集落へ行くのにさえ船を用いなければなら

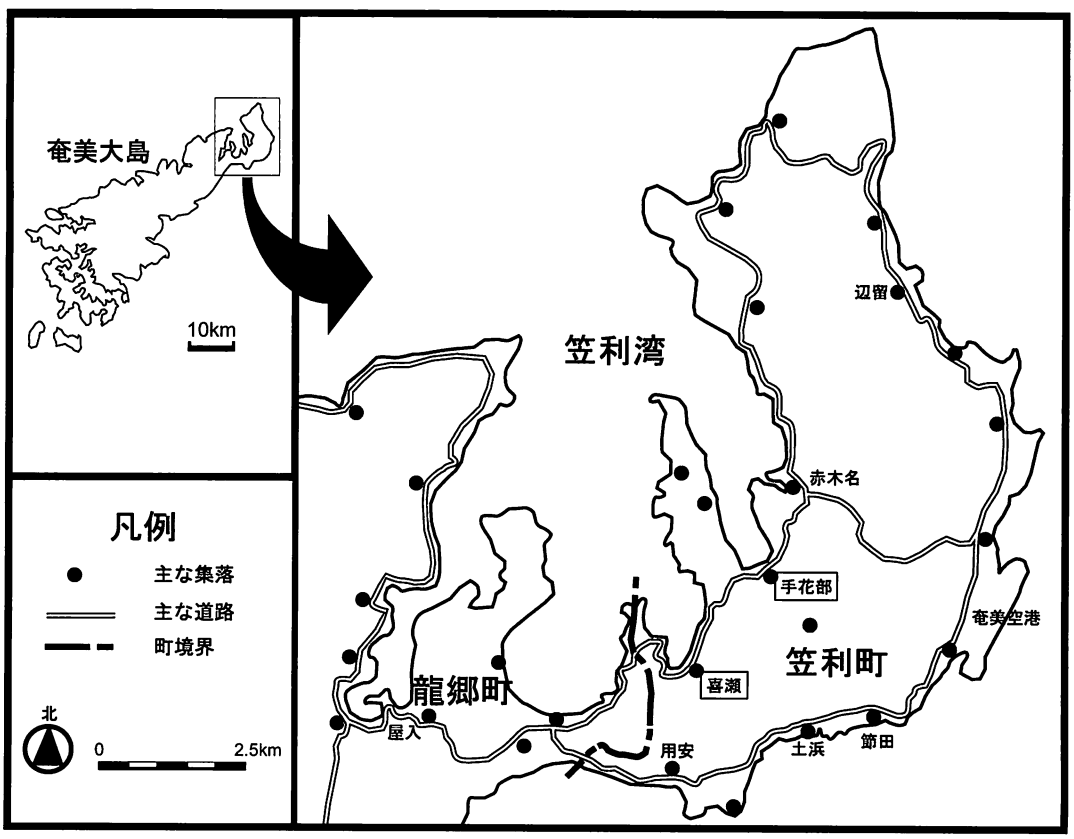

図1　調査地の位置

ないことが多かった。このため，笠利町を中心とする北東部の人びとは，南西部の人びとに比べて大らかだと言われることもある。なだらかな地形を生かして，明治以降にはサトウキビ栽培が盛んであった。また，九州本土に近いことから交通の要所でもあり，明治後期には一時的にカツオ漁と関連産業が盛んだったこともある［笠利町誌執筆委員会 1973］。

出稼ぎや移住も盛んであった。後で述べる村本誠吾さんの父親は戦前に台湾へ渡っているし，戦後も沖縄の基地建設のために多くの人びとが渡ったという。また，1960年代から70年代初めにかけては，本州方面で雇用が増えたために多くの人びとが働きに出たほか，大島紬の行商のために内地へ渡る人も多かった。こうしてみると，奄美群島の本土復帰（1953年）までは沖縄の米軍基地の景気に，それ以後は本州方面の高度経済成長に支えられて，笠利町の生活が成り立っていたのである。

本土復帰はまた，島の基盤整備の開始にも重なっている。後述する加藤シヅエさんの記憶では，喜瀬地区近辺の海岸は復帰直後に護岸された。護岸のおかげで，家のそばまで波が上がることはなくなったが，同時に貝も少し減ったという。やはり後述する浜ノリ子さんによると，これと同じ頃，喜瀬集落の目抜き通りである「六尺道」が廃止され，陸側を通る国道が開通した。六尺道は荷馬車には適していたが，自動車には通りにくかったらしい。こうした基盤整備は，1960年代初頭にいちおうの完成をみる。1962年には笠利町の赤木名地区で精糖会社が大規模な操業を開始し，1963年には島内でテレビ放送が開始され，1964年には旧奄美空港が笠利町の節田地区に完成した。(4)

笠利湾の海岸環境は，集中的な基盤整備がおこなわれた後も変化している。入佐［1998］によれば，1971年に喜瀬地区の海岸環境整備がおこなわれて護岸区域が広がり，1976年には喜瀬漁港が築工された。後述の加藤さんによれば，1990年代にもこの漁港は拡張したという。このほか，喜瀬干潟の先（湾口寄り）には石油備蓄施設もある。手花部には漁港や石油備蓄施設がないが，干潟の先にエビ養殖場がある。ある地区住民によれば，操業開始は1992年頃だったという。また，調査をおこなった2003年の時点でも，国道の拡幅のため，手花部集落に面する干潟が狭められていた。

このように，復帰後の半世紀をとおして，2つの集落の海岸環境は大きく変化してきたとみてよい。しかし，大潮の干潮時になると，貝拾いのために干潟に出る人が今でも散見される。近年では付近住民のほか，大島支庁の所在地である名瀬市から車で貝拾いにやってくる人も少なくない。また，手花部干潟には，100mほどにわたって石干見［田和 2002］の址が連なっている。これは，大潮の潮汐差を利用して魚を浅瀬に追い込むための石垣で，現在は使われていないものの，つい近年まで干潟が生業の場として貴重だったことを示している。

2003年現在の笠利町の人口は7,074人，3,051世帯であった。1世帯あたりの人数が少ないことは，核家族世帯や独居老人世帯が多いことを示していよう。本研究の聞き込み対象者が在住する集落の人口を列挙すると，喜瀬511人236世帯(5)，手花部175人86世帯，節田624人281世帯であった。

エリシテーション法

本研究では，人びとの貝類知識について知るために，貝類標本を用いたエリシテーションによって聞き込みを進めた。エリシテーションとは，調査者があらかじめ準備した絵や写真，動画，物体などをインフォーマントに見せることにより，それに関連した情報を引き出す（elicit）というインタビュー方法である[6]。認識人類学の分野では，生物名などの民俗語彙を体系的かつ確実に収集するために，生物標本を見せるというかたちでこの方法が広く用いられてきた[7]。ただし，この分野では，人と自然の関わりが必ずしもじゅうぶんに記述されてきたわけではない。体系的かつ網羅的な民俗語彙のリストが作成されてはきたものの，それ自体は，人びとによる自然認識の過程と区別されるべきである［寺嶋 2002］。認識人類学はその後，心理学の影響を受けながら認知モデルの形式化を進めるいっぽうで［D'Andrade 1995］，自然認識に対する関心を弱めていった[8]。

こうしたなか，人と自然の関わりに関心の力点を置く論者たちは，認識人類学の主流とは別のかたちでエリシテーションを活用していった。エリシテーション法を他の方法論と併用したり，民俗語彙以外のデータを集めるのにエリシテーション法を用いることで，独自の問題領域に切りこんでいったのである。

たとえば松井は，民俗語彙の一覧表づくりに飽き足らず，「民俗分類の構造」である一覧表づくりに加えて「民俗分類の機能」の研究が不可欠だと主張する［松井 1989］。すなわち，自然に関する知識が日常生活のなかで具体的に運用されるようすを，記述し分析するべきだというのである。この「機能」についての研究は，生業活動をはじめとする人びとのふるまいを参与観察しながら進められるもので，生態人類学の方法論とほぼ重なり合う。松井はのちに，この分野の研究を「二次的なエスノ・サイエンス」と呼びかえるが［松井 1991：76］，一部の生態人類学者たちもこの分野の研究を進めて『エスノ・サイエンス』と題する論文集［寺嶋／篠原 2002］を刊行している。松井らのプロジェクトにおいては，エリシテーション法は参与観察法と併用されるようになったといってよい。

いっぽう，民俗語彙を採集するためにのみエリシテーションを用いるのでなく，他の情報を集約的に引き出すためにこれを活用することも試みられている。すでに述べた「エスノ・サイエンス派」の生態人類学者らも，エリシテーション法により，植物の利用法など多彩な情報を聞き出してきた。しかし，そこで得られる情報は，ほとんどの場合，個々の生物が人びとの生活にいかに役立っているかという資源的価値にとどまっている。この点，篠原による一連の研究［篠原 1990；1994］は，それを大きく踏み越える。生物の資源的価値に加え，それら生物に対するイメージを聞き出すことにより，総体的な「自然知」を提示しようというのである［篠原 1990：6–8］。そのなかでは，直接観察も重視されているものの，エリシテーションそのものが「観察と聞き書きの共振」を前提としているため［篠原 1994：267–269］，生態人類学的な定量的データは相対的に多くない。あくまで，語りという定性的データをエリシテーション法によってきめ細かく引き出すなかから，人びとの心意に接近している。この試みによって，エリシテーション法の果たすべき役割は大きく広げられたといってよい。

本稿では，以上の3つの立場とは別の観点からエリシテーション法を採用することで，人びとと

海の関わりにアプローチしていきたい。その立場とは，エリシテーション法の利点のうち，異なるインフォーマントに対して同内容の聞き込みを反復的におこなえる点を重視する立場である。

これまでの多くの研究では，地理的な限界をもつ自然に人びとがいかに関わるかと問いかけるあまり，その地理区域内に暮らすすべての人びとが自然に対して一様な関わり方をするように想定されてきたふしがある。この仮定は，完全に有効性を失ったとはいえないものの，時代が進むにつれて妥当でなくなってきているのではなかろうか。たとえば，前節で明らかにしたように，笠利湾奥部の海岸環境はこの半世紀をつうじて大きく変化しているし，人びとの暮らしも変わってきている。こうしたなか，人びとと海との関わり方も，貝類に関する人びとの知識も，世代によって大きく異なると考えるほうが妥当であろう［松井 1989：106-111，120；篠原 1994：190-197］。しかし他方で，上の世代による海との関わりこそが地域に固有の民俗であり，下の世代においては関わりが損なわれているとは言いきれない。少なくとも，エコトーン環境のゆくえを見据えるうえでは，下の世代による関わりも等しく現状をあらわしているととらえ，記載に反映させるべきであろう。このことが問題になるのは世代差だけではない。性差，職業的差異，ライフヒストリーの差異など，あらゆる個人的偏差が記載に反映することが理想である。人びとと海との具体的な関わりは，そうした個人的な差異を通してこそ明確になってくるはずである。

特定地域における人と自然の関わりを，このように個人的偏差まで視野に入れながら記述しようとするなら，エリシテーション法のもつ可能性は大きい。この方法では，すべてのインフォーマントに対して一定の手続きで聞き込みを進めることにより，特定のテーマに関して複数の語りを引き出せるからである。

個人的偏差に着目する意義としてもう一点，南西諸島における貝類知識の研究という文脈から述べておきたい。この地域における貝類の民俗分類では，ある方名を代表する典型としては特定の一種のみが対応させられるものの，広い意味では複数種がその方名に対応する場合がある［松井 1983：45-46］。こうしたなかにあって，多様な種をいくつかの方名にまとめるやり方は，各人の生活とのかかわりで自在に操作される［松井 1989：84-85］。したがって，一人の話者が民俗知識の体系を一身に保持していると仮定することはできない。むしろ，民俗知識の個人差にこそ，地域の自然と人間生活の関係があらわれている。この点でも，個人的偏差に着目することの意義は大きいといえるのである。(9)

奄美大島北部における貝類知識の先行研究

前節から，先行研究に欠落し本稿が確保しようとした視座は，ほぼ明らかであろう。人びとの生活にかかわるエコトーンの生物については，民俗学において数多く報告されており，本稿の対象となる笠利湾近辺では，恵原義盛の『奄美生活誌』［恵原 1973；1974 も参照］や，龍郷町誌［龍郷町誌民俗編編さん委員会 1988］などに詳しい記事が掲載されている。また，方名や利用方法の一覧表は，貝類学［行田 2000］や考古学［中山 2000］の分野でも詳しいものが作成されている。

しかしこれらの研究では，人びとの生活と海との関わりは固定的で，地域内で共有されているという先験的な前提があり，この点に不満が残る。もちろん，これらの研究はそれぞれの分野におけ

る価値をもっており，筆者らもそれを否定しない。だが，人びとと海の関わりを記述するという目的のもとでは，個人差や時代差を無視すると具体性が捨象されてしまい，現状を見誤るおそれがある。地域に固有な海との関わり方があるとしても，それは，個人的偏差の反映した資料を整理するなかでおのずから抽出されるはずであろう。そこで本稿では，いわば「インフォーマントの顔が見えるように」記述を進めていきたい。それぞれのインフォーマントがどのような活動を通じて海と関わってきたかに着目することで，人びとの生活と海の関わりの現状と可能性を探るのが，本稿の目的である。

❷……方法

貝類標本

調査期間は，2003年6月12日から7月2日までの21日間であった。この間に大潮は2回あったが，最初の大潮（6月13日～16日頃）には広く貝類採集をおこない，貝類標本を作製した。このときには，笠利湾周辺にかぎらず，外洋に面した辺留（べる）のサンゴ礁原や土浜の砂浜海岸（図1参照），奄美大島各地の干潟などでも採集をおこなった。干潟に出ている人がいれば，方名などに関する断片的な情報を採集したが，それらの情報は本稿の記述にほとんど反映されていない。エリシテーション調査は，中潮以降におこなった。2度めの大潮（6月28日～7月1日頃）には，エリシテーション調査の対象者に同行して干潟で貝類を採集することがあり，その際の情報は本稿にも反映させた。

最初の大潮時の採集には筆者らが2人とも参加したが，名和は貝類相記載のための観察に徹し［名和　準備中］，飯田の集めた標本を後で同定するという役割分担をおこなった。貝類の標準和名や学名の表記は，主として奥谷［2000］や久保／黒住［1995］を参考にした。同定された標本数は171種にのぼったが，このなかには，貝類（軟体動物）に分類されないものも6種含まれる[10]。また，生きている貝だけでなく，落ちている貝殻を標本としたものも少なくない。この結果，奄美大島には生息しないはずのアサリやマガキも標本化された。おそらく，スーパーなどで購入された貝の殻が海岸に破棄されたものであろう。また，ボタン原料として一時期乱獲されたため現在では深い水域にしか生息しないと思われるサラサバテイ（水産名タカセガイ）や，陸生のアフリカマイマイなども標本化された。

エリシテーションは，筆者らのうち飯田がもっぱら担当した。最初は上記の標本すべてを用いて聞き込みをおこなおうとしたが，標本が多く話者に負担がかかることが危惧されたため，表1から表3に掲げた84種を選択し，これらについて重点的に聞き込みをおこなうことにした。選択された種は，1ケ所で多数採集されたものや多くの地点で採取されたもの，食用であることが事前に知られていた種などである。逆に選択されなかった種は，色褪せたために生きている状態を想像しにくいものや，数が少なかったりサイズが小さかったりしたため筆者（飯田）の印象に残りにくかった種などである。このように，標本は主観的な基準にもとづいて取捨選択され，「大きく丈夫で海岸に殻の残されている率が高く，かつ目につきやすいもの」が選ばれる傾向にあった［松井1989：

36-37]。しかし，人びとと海との関わりを示すという意味では，多彩な種をとりあげたつもりである。

聞き込み対象者

インフォーマントの選定についても，とくに基準があったわけではない。当初は，とくに貝に詳しい人ではなくとも，他のインフォーマントと比較するうえで有益な情報をもたらしてくれると思っていた。しかし結果的に，忍耐強く調査に付き合ってくれたのは，貝が好きでよく集めている人が多かった。聞き込みに応じてくださったのは以下の5人の皆さんで，いずれも仮名にしてある。

加藤シヅエさん（60歳代女性，喜瀬在住）は，喜瀬生まれ。喜瀬では，もっとも早く貝の収集を始めた人として知られる。幼い頃から，貝の模様が紬の柄に応用できないかと考え，「赤い洋服や白い洋服の貝」を集めるのに夢中だった。周りの人からは「クンガラ（貝殻）ばっかし集めてバカじゃないかね」と言われていた。また，アメリカ占領時代（1945～53年），日本から船が来なくなって瀬戸物が入手困難になったとき，貝殻を器として用いるようになった。観光施設である奄美パーク（註4参照）の開館式典では，彼女の集めたクロタイラギの殻が器代わりに用いられ，好評を博したという。「貝に見とれて，獲物取りまで上手になった」というのが加藤さんの自慢である。

浜ノリ子さん（60歳代女性，喜瀬在住）は，喜瀬出まれ。小学校時代に終戦を迎える。赤木名（笠利町役場所在地）の高校を卒業し，5～6年のあいだ，博多と名瀬で仕事をしていた。名瀬では，作家の島尾敏雄が通う本屋で働き，よく写真に撮ってもらったのを覚えている。結婚してからは喜瀬で住むが，その後も大島紬を織るなど，いろいろなアルバイトを経験している。2年ほど前にはホームヘルパーの資格もとった。貝収集歴約20年。

村本誠吾さん（60歳代男性，手花部在住）は，台湾生まれ。終戦と同時に父の故郷だった手花部へ引き上げ，小学校・中学校時代の約10年間を手花部で過ごした。貝を集めて食卓に貢献したこともある。中学卒業後は名瀬の高校へ進学し，信用組合へ勤務。手花部出身の妻と結婚。定年退職と同時に手花部へ帰り，新築した自宅に住むようになった。

山田恵子さん（40歳代女性，手花部在住）は，手花部出まれ。高校卒業後，東京で働き，熊本県出身の夫と知り合う。20年ほど前に手花部に戻り，夫は町内の団体職員を務める。夫とともに，貝収集歴十余年。

田畑ヨシエさん（60歳代女性，節田在住）は，節田出まれ。家が山手にあるため，海に出るほうではなかったが，それでも子どもの頃はたまに海へ行った。その節田海岸は笠利湾とは反対の方角にあり，外洋に面しているため，笠利湾とは異なった海岸環境にある。喜瀬干潟など笠利湾方面に行くようになったのは，5～6年前に貝殻の収集を始めるようになってからである。

このほか，加藤さんの夫，村本さんの妻，山田さんの夫も同席して話を聞かせてくださったが，特に明記しないかぎり，聞き込みに積極的に反応したのは上記5人のいずれかである。

上記5人のうち，村本さんを除く4人は，自宅の応接室を貝殻で飾るのにきわめて熱心であった。4人とも，時計店や宝石店の陳列に使うショーケースを少なくとも1つは部屋に安置し，その中に所狭しとばかり大小の貝殻を並べていた。貝は，形や大きさ，色などを基準に分類され，同じグ

ループを同じ場所に集めることで無数の貝殻が秩序づけられていた。加藤さんによると，こうした室内装飾は7～8年頃前から島内で盛んになり，そのために貝を買い集める人もでてきたという。また，村本さんの奥さんも貝に興味がないわけではなく，タカラガイなどの小さな貝を小壜につめて部屋に飾っていた。

❸……結果1　喜瀬在住の60代女性2名における貝類知識

貝類以外の海産動物

まず，喜瀬在住の60代女性2名によって寄せられた情報を，筆者の観察と生物学的知識に照らし合わせながら整理しよう。他の3人から寄せられた情報は，次節以降で整理したい。本節（結果1）および次節（結果2）において「筆者」（単数）と記した場合，とくにことわりのないかぎり，エリシテーションと草稿作成を担当した飯田を指すこととする。本節と次節で述べられている生物学的知識は，貝類学を修めたことのない飯田が調査を通じて得た程度のものであり，ほとんどが貝類図鑑［eg. 久保／黒住 1995］に述べられている。貝類研究者である名和がおこなった指摘は，すべて脚注に示した。また，表1～3に示した貝類の生息地情報は，久保／黒住［1995］のほか，名和の貝類相調査の成果に依拠している。名和によるこの調査は，1990年から2004年にかけて，琉球列島の干潟約60箇所で継続的におこなってきたものである。

表1に示したのは，貝類に類似してはいるが貝類でない生物についてよせられた情報である。このうち，インフォーマントの関心をもっともひいたのはミドリシャミセンガイであった。これは，やや硬い砂利の混じった粗砂底にもぐって生息しており，二枚貝に似た殻を有している。加藤さんは方名について言及しなかったが，「ここの海にしかいない」ことを強調した。彼女はまた「佐賀に類似種がいる」とも言っていたが，これは有明海のオオシャミセンガイを指すのであろう。[11] この生物の稀少性や類似種についての認識は，他の干潟の生物相との比較なしには生じえないものであり，マスメディアからの情報と身近な自然環境の照合によって定着したと推測できる。なお，この動物の「ひも」（腕足の部分）は，酢味噌をつけて食べることもできるし，だしをとるのにも適している（加藤，浜）。干潟の幸として貴重であることがうかがえる。

表1　エリシテーションに用いた標本と，喜瀬の女性2名からの情報（貝類以外）

和名	学名	生息地		方名[1]		利用法[2]		標本収集地[3]
		内湾干潟	サンゴ礁周辺	加藤	浜	加藤	浜	
腕足動物門								
ミドリシャミセンガイ	*Lingula anatina*	○		(シャミセン)	ツメックワ	○	○	T，(K)
節足動物門								
カメノテ	*Capitulum mitella*		○	トリノツメ	トゥリンツムン		△	住用
棘皮動物門								
ナガウニ	*Echinometra mathaei*		○	ガスツ，(ウニ)	(ウニ)		■	b

1）（　）内は，標準和名や水産物商品名にもとづき，純粋な方名ではないと思われる名称。
2）○：食用，△：食用だが自分は食べない，×：おいしくない，■：食用以外の利用（本文参照）
3）K：喜瀬，T：手花部，Y：屋入，b：辺留，ts：土浜（図1参照）。大文字は笠利湾内，小文字は外洋に面した場所。他の収集地は町村名で示した。（　）内は，聞込みで用いなかった標本の採集地。

カメノテは，外洋に面した岩礁に付着する生物であり[12]，やはり殻を有している。加藤さんによる方名は，本州人である筆者に意味がわかるよう発音してもらったものであり，実際の方名は浜さんの発音に近い。筆者は，同じ奄美大島の住用村で，この種が食用とされているのを目撃した。しかし，喜瀬など湾奥の干潟ではほとんど見かけないためか，浜さんは「食べる人もいる」と述べるだけであり，加藤さんは方名をなかなか思い出せなかった。このようにあまり身近でない生物がかろうじて認知されているのは，それを利用する可能性が皆無とはいいきれないためであろう。つまり，将来の利用可能性のために，身近には見かけない生物にも関心が寄せられているのである。

ナガウニの標本は，棘もとれて殻だけになっていたにもかかわらず，それが食用のシラヒゲウニと異なることを浜さんは言い当てた。彼女によれば，化学肥料の普及する昭和30年代まではこのナガウニが肥料として用いられており，喜瀬集落の南の峠を越えた用安（図1参照）の海岸までテル（背負い籠）をかついで拾いにいっていたという。この例も，身近に見られない生物に関心が寄せられた例といってよいだろう。

巻貝など，二枚貝以外の貝類

次に，巻貝類や皿型の殻をもつ貝類，殻のない貝類，イカやタコなどの頭足類についての情報を表2にまとめた。多板類であるヒザラガイ（最上段）と頭足類であるコウイカ（最下段）以外はすべて，分類学上，巻貝の仲間（腹足綱）に属する。巻貝類は一般に，砂地や泥質地よりも岩礁域に多い。多板類のヒザラガイも同様である。頭足類のコウイカは，広範に遊泳しながら生活するため，他の貝類に比べて深い水域に多い。いずれにせよ，表に掲げた多くの種は，湾奥部の干潟よりもむしろ外洋に面したサンゴ礁地形に多く生息する。ところがいくつかの種は，表に示したように，干潟内部の転石帯や干潟の先の深場（潮下帯）にも生息している。とくに転石帯の巻貝類群集は，カンギクやマルアマオブネを優占種とするもので，内湾に特有である。観察によれば，クサズリガイ科，アマオブネガイ科，リュウテンサザエ科，スイショウガイ科，タカラガイ科，タマガイ科，ドロアワモチ科の種が笠利湾奥部にも見られた。このように喜瀬でも身近に見られる巻貝類は，利用のうえでも身近であることがエリシテーションによって明らかになった。

クサズリガイ科の**ヒザラガイ**は，小判のような形をした貝で，表面には板状の殻が8枚，瓦のように一列に並んでいる。干潟内部の転石に付着する。2人の述べた方名は異なるように思えるが，これは筆者が表記しやすいよう発音したためであり，実際には「ギズマ」の「ギ」も「ズ」も曖昧母音である。2人とも，この貝は食用であるが固いと指摘した。料理する場合には，長時間煮るか（浜），圧力鍋を用い（加藤），味噌漬けにすることが多い（浜，加藤）。加藤さんはさらに，これが喘息の薬にもなると指摘した。なお，町役場所在地の赤木名にあるスーパーマーケットでは，「ギジマ」という名称で，この貝を冷凍にしたものが販売されている（筆者観察。以下，スーパーの商品に関する情報は，すべて筆者の観察による）。

アマオブネガイ科の貝類は，直径2cm程度で球形に近い形をしており，干潟内部の転石に付着する。そのうちの**アマオブネ**と**マルアマオブネ**を別々に加藤さんに見せたところ，前者は「マラツンニャ（もしくはマラツ）」，後者は「マナツンニャ」だという答が返ってきた。「ンニャ」は貝を意

表2　エリシテーションに用いた標本と，喜瀬の女性2名からの情報（巻貝類など）

和名	学名	生息地 内湾干潟	生息地 サンゴ礁周辺	方名[1] 加藤	方名[1] 浜	利用法[2] 加藤	利用法[2] 浜	標本収集地[3]
新ヒザラガイ目（多板綱）								
クサズリガイ科								
ヒザラガイ	*Acanthopleura japonica*	○	○	ギズマ	グズマ	○	○	Y，(K)
カサガイ目（腹足綱）								
ツタノハガイ科								
オオベッコウガサ	*Cellana testudinaria*		○	ナブンニャ	ナブンニャ			住用
古腹足目（腹足綱）								
ミミガイ科								
イボアナゴウ	*Haliotis varia*		○	トコブシ	アワビ，トコブシ		○	
ミミガイ	*Haliotis asinina*		○	ヌズリンニャ	ヌズリンニャ			T，(ts, 瀬戸内)
アマオブネガイ科								
アマオブネ	*Nerita albicilla*	○	○	マラツ〔ンニャ〕	マナツ	○	△	b
マルアマオブネ	*Nerita squamulata*	○		マナツンニャ	(マナツの一種)			瀬戸内，(Y)
ニシキウズガイ科								
サラサバテイ	*Trochus niloticus*		○	(タカセ)	アンサレ		○	K
ニシキウズ	*Trochus maculatus*		○	タマンニャ	アンサレ		○	K，(住用)
リュウテンサザエ科								
カンギク	*Turbo coronatus coronatus*	○		サダリ	シャーダリ	○	△	住用，(K，Y)
チョウセンサザエ	*Turbo argyrostomus*		○	カタンニャ	カタンニャ		○	瀬戸内，(K)
盤足目（腹足綱）								
オニノツノガイ科								
オニノツノガイ	*Cerithium nodulosum*		○	(オニノツノ)	(ウシノツノ)		○	瀬戸内
スイショウガイ科								
クモガイ	*Lambis lambis*		○	(クモガイ)	マヤンニャ			瀬戸内，(K)
スイショウガイ	*Strombus canarium*	○		オンナトゥビンニャ	—			K，(T)
マガキガイ	*Strombus luhuanus*	○	○	トゥビンニャ	—	○		T，(K，b)
タカラガイ科								
キイロダカラ	*Cypraea moneta*	○	○	ビッキャ〔ンニャ〕，ビッキャムック，ウシックワ	ビッキャンニャ	■	○	K
ハナマルユキダカラ	*Cypraea caputserpentis*		○	クロムック	サデムク		■	瀬戸内，(ts)
ハナビラダカラ	*Cypraea annulus*		○	ムック	—		○	ts
ヤクシマダカラ	*Cypraea arabica asiatica*		○	(ヤクシマダカラ)	(ヤクシマダカラガイ)			K
タマガイ科								
ホウシュノタマ	*Natica gualtieriana*	○		アヤハキ	アヤカキ	○	○	瀬戸内，(T)
フジツガイ科								
ホラガイ	*Charonia tritonis*		○	ブランニャ	ブランニャ	■	■	瀬戸内
新腹足目（腹足綱）								
アクキガイ科								
アカイガレイシ	*Drupa rubusidaeus*		○	スンニャ	(イガレイシ類)			b，(瀬戸内)
ガンゼキボラ	*Chicoreus brunneus*		○	スンニャ	(ガンゼキボラ)		○	b
シラクモガイ	*Thais armigera*		○	ガブンニャ	(イガレイシ類)		○	b
ツノレイシ	*Mancinella tuberosa*		○	ガブンニャ	(イガレイシ類)			b，(瀬戸内)
テツレイシ	*Thais savignyi*		○	ガブンニャ	(イガレイシ類)			住用
ホソスジテツボラ	*Purpura persica*		○	スンニャ	(テツボラ)	○	×	住用
ムラサキイガレイシ	*Drupa morum*		○	スンニャ	(イガレイシ類)			瀬戸内
オニコブシガイ科								
オニコブシ	*Vasum ceramicum*		○	ガブンニャ	(イガレイシの一種)			瀬戸内
コオニコブシ	*Vasum turbinellum*		○	ガブンニャ	(イガレイシ類)			瀬戸内
イトマキボラ科								
イトマキボラ	*Pleuroploca trapezium*		○	コワルンニャ，シュカックワ	クワルンニャ	■		K

イモガイ科								
クロザメモドキ	*Conus eburneus*		○	ブトゥンニャ	(イモガイの一種)			K，(瀬戸内)
マダライモ	*Conus ebraeus*		○	ブトゥンニャ	(マダライモガイ)			ts，(b)
ミカドミナシ	*Conus imperialis*		○	ブトゥンニャ	(イモガイの一種)			瀬戸内
収柄眼目（腹足綱）								
ドロアワモチ科								
イソアワモチ	*Onchidium verruculatum*	○	○	コーム	コーム	○	○	瀬戸内
基眼目（腹足綱）								
カラマツガイ科								
コウダカカラマツ	*Siphonaria laciniosa*		○	トンガリンニャ，カサ	—		■[4]	T，(K)
柄目目（腹足綱）								
アフリカマイマイ科								
アフリカマイマイ	*Achatina fulica*			アメリカマイマイ	アメリカマイマイ			b
コウイカ目（頭足綱）								
コウイカ科								
コウイカもしくはコブシメ	*Sepia sp.*			クブシムン	(コウイカ)			b

1）（　）内は，標準和名や水産物商品名にもとづき，純粋な方名ではないと思われる名称。「ンニャ」は貝を意味する接尾辞で，これが省略可能なことを確認できた場合は〔　〕に入れて示した。
2）○：食用，△：食用だが自分は食べない，×：おいしくない，■：食用以外の利用（本文および4）参照）
3）K：喜瀬，T：手花部，Y：屋入，b：辺留，ts：土浜（図1参照）。大文字は笠利湾内，小文字は外洋に面した場所。他の収集地は町村名で示した。（　）内は，聞込みで用いなかった標本の採集地。
4）笠利湾に面しない佐仁という集落で，胃薬として用いられている。

味する接尾辞で，しばしば省略可能である。マラツとマナツは，意識的に呼び分けられているわけではないようだ。浜さんの答から推測できるように，アマオブネがマナツないしマラツの典型であり，マルアマオブネなどの類似種も同じ名で呼ばれていると考えたほうがよい［cf. 松井1983：45-46；1989：84］。食用に適していると認知されているのはアマオブネのほうで，2人とも「おつゆにするとおいしい」と述べた。加藤さんは，筆者が最初に訪問したとき，それを出して食べさせてくれた。浜さんは，アレルギーがあるためにそれを食べないというものの，何度目かの訪問のおりには筆者に食べさせてくれた。この貝は，きわめて頻繁に食卓にのぼるといってよい。なお，前述した赤木名のスーパーでは，「マナツニャ」という名でアマオブネが売られていた。(13)

リュウテンサザエ科の**カンギク**も，干潟周辺の転石に付着する。浜さんは「喜瀬を代表する貝」だという。実際にこの貝は，内湾性巻貝類の典型であり，外洋に面したサンゴ礁地形などにはほとんど見られない。逆に同じ科の**チョウセンサザエ**は，外洋に面した用安（図1参照）などに多いという（浜）。カンギクの方名にも揺らぎがみられるが，話し言葉のなかでは，加藤さんによる方名も浜さんによる方名も同じように発音されると思われる。この種も食用である。浜さんによれば「ハラワタがとくにおいしい」といい，加藤さんは「肝臓や腎臓の病気に効く」という。加藤さんの食べさせてくれたアマオブネのすまし汁にはカンギクも入っており，身近な食材だといえる。赤木名のスーパーでも，この貝が「シャダリンニャ」という名で売られていた。

スイショウガイ科の貝類は縦長の形状をしており，潮下帯の砂底や礫底などに生息する。このため，干潟周辺では見かけることがあっても大量に採集されることはない。浜さんがこの仲間についてあまり詳しくないのに対し，潜り漁の得意な夫をもつ加藤さんが詳しいのは，このためであろう。**マガキガイ**は水産上重要な種で，大島支庁の所在地・名瀬市の鮮魚店などでも頻繁に見かけるし，笠利町漁協では他県に出荷しているという（筆者聞き込み）。加藤さんもこれを食用にするが，「正

月のすまし汁に入れる」という言葉から推測すると，アマオブネやカンギクほど頻繁には用いないようである。加藤さんによれば，昔は潜れば採れたのに，今はあまり採れない。**スイショウガイ**は，マガキガイと同じく「トゥビンニャ」という方名で呼ばれるが，両者を区別する場合にはマガキガイを「オトコ（男）トゥビンニャ」，スイショウガイを「オンナ（女）トゥビンニャ」と呼び分ける（加藤）。

タカラガイ科の貝類は卵形をしており，さまざまな環境の低潮線付近に生息する。笠利湾奥部では，アマモなどの生える砂礫地で**キイロダカラ**を見かける。この貝は，ビッキャ，ビッキャンニャ，ビッキャムックなどの方名をもつ。「ビッキャ」とは蛙のことで，この貝を上から見ると，たしかに蛙がうずくまっているように見える（以上，筆者観察）。浜さんはこの貝が食用になること，加藤さんはおはじき遊びの道具になることを述べた。おそらく，2人とも2つの用法を知っているのだろうが，そのうちの1つを説明するのに気をとられてしまったのだと思われる。この貝は，煮てから殻を割って身を食べることもできるが，だしをとるためだけにも用いられる。浜さんは，貝殻を集めているため殻を割ったことはないという。おはじき遊びをするとき，自分のはじく貝と取ろうとする貝の間に指で線をひくが，これは間隔がじゅうぶんに開いていることを示すためだそうである（加藤）。

キイロダカラ以外にも，たくさんの種類のタカラガイがあることが知られている。浜さんは，すべてのタカラガイが食用になることを，加藤さんは，すべてのタカラガイがおはじき遊びに用いられることを指摘した[14]。タカラガイの総称をあらわす「ムック」とはおはじきの意味である（加藤）。**ハナマルユキダカラ**の方名として浜さんが言及した「サデムク」のムクもこれと同じであろう。サデとは枠つきの漁網のことで，その漁網の錘としてこの貝が用いられていた（浜）。エリシテーションに用いなかった**カモンダカラ**などのやや珍しい貝は，おはじき遊びにおいてはキイロダカラ2個と交換されていた（加藤）。なお，赤木名のスーパーでは，各種タカラガイを冷凍にしたものが「ムック貝」という名で販売されていた。主に食用であろう。また，**ハチジョウダカラ**や**ホシダカラ**などの大型種は，殻だけが「タカラ貝」として販売されることもある。こちらは装飾用であろう。

タマガイ科の**ホウシュノタマ**も，転石の付近でよく見かける貝で，数珠の玉のような形・大きさの貝である。2人とも，この貝を「おつゆに入れる」。2人はまた，方名の由来についても教えてくれた。加藤さんによれば，「アヤハク」とは足跡を残すという意味で，この貝はアヤハイて移動するのだという。浜さんも，この貝がカタツムリのような這い跡を残して移動するといい，「アヤカキ」は「綾書き」という字を書くのだろうと述べた。

ドロアワモチ科の**イソアワモチ**[15]は，殻をもたず，小判型のナメクジのような貝類である。この種は，内湾だけでなく外洋に面した場所にも生息しており，笠利町内にはこれを食用とする集落もある（筆者聞き込み）。この貝が食用になることは2人とも知っていたが，食べたことはほとんどないそうである。外洋と内湾では，生息密度や味などの違いのために利用頻度が異なるのかもしれないが，今回の調査結果からそれを示すことはできなかった。

以上に述べた貝類の方名や利用法については，加藤さんと浜さんによる情報はよく一致しているといってよい。強いていえば，スイショウガイ科の貝について知識の差がみられるていどである。このことから，干潟で見られる貝類については2人とも高い関心をもっており，上の世代から受け

継いだ知識や図鑑中の知識にも通じているといえる。

いっぽう，表2に掲げた貝類のうち上で述べなかったものに関しては，情報が一致するものと一致しないものに分かれた。**ニシキウズガイ科**の貝類はまったく異なった方名で呼ばれているし，**アクキガイ科**や**オニコブシガイ科**，**イモガイ科**の呼び方も異なっている。アクキガイ科以下のグループについて加藤さんが答えた方名の多くは，外洋に面した辺留や須野の集落でも用いられているが（筆者聞き込み），浜さんは標準和名でそれを指示しようとしている。これらの貝は，いずれも外洋に面したサンゴ礁地形に多い貝類であり，喜瀬ではなじみが薄いのであろう[16]。

同じく外洋に面したサンゴ礁地形に多いにもかかわらず，2人の情報の一致度が高かったのは，ツタノハガイ科のオオベッコウガサ，ミミガイ科のイボアナゴウやミミガイ，フジツガイ科のホラガイ，イトマキボラ科のイトマキボラなどであった。また，陸生の**アフリカマイマイ**に関する情報も一致していた。皿型の**オオベッコウガサ**は，赤木名のスーパーでは「カブト貝」という名で販売されており，食用にされることもあるようだが，2人はこの点に関して言及しなかった。喜瀬の近くであまり見かけないためであろう。**ホラガイ**は，「ラッパのように」鳴らすのに用いる。加藤さんによれば，この貝が鳴らされたのは火事のときだったので，あまりよい印象がないという。この貝は，赤木名のスーパーでも冷凍して売られていた。**イトマキボラ**は，筆者が目撃しなかっただけで，喜瀬でも時おり見かけるらしい。とくに，数個が固まって一ケ所に集まっているという証言は，2人のあいだで一致している。方名中の「シュカ」は急須のことで，この貝は水差しの代わりになったという（加藤）。また，「クワル」はアカショウビンという鳥の方名である（浜）。この貝も，赤木名のスーパーでみかけた（商品名の表示はなかった）。

要約すれば，干潟でも見かける巻貝に関しては，2人の情報の一致度は高い。外洋に面したサンゴ礁で多く見かける巻貝類は，情報が一致する場合とそうでない場合がある。ホラガイやイトマキボラのように道具として用いられる貝に関しては，情報が一致する傾向にあるのかもしれない。

二枚貝類

最後に，二枚貝類に関する情報を表3にまとめた。二枚貝類は一般に砂礫や泥の中に埋在しており，人目につきにくいうえ，底質の粒径などに制約されて干潟域全体に分布するとはかぎらない。そのためか，巻貝類の場合と異なり，干潟環境に生息する種に関して2人の情報が一致するとはかぎらなかった。まずは，干潟に生息する二枚貝類のうち，2人が同じ方名で呼ぶものについて見てみたい。そのような種は生態がよく知られ，よく利用されていることが，以下からわかるであろう。

イガイ科の**ホソスジヒバリ**は，ムール貝（ミドリイガイ）の仲間である。喜瀬の近くにもおり（加藤），砂地の転石に「根っこ」でくっついている（浜）[17]。「根っこ」とは足糸のことであろう。この貝は食用である。

キクザルガイ科の**シロザル**は，片側の貝殻が岩に固着するよう石灰化する貝で，殻が非常に厚い。転石を起こすとこの貝が見つかることがある。岩と一体化する点でシャコガイ類に似るためか，浜さんは「アスカヤ（ヒメジャコ）の兄弟分である」というし，同様の性質をもつオハグロガキも，加藤さんは同じ方名で呼んでいた。シロザルを採るときには，「上蓋だけとって身を取り出す」（加

表3　エリシテーションに用いた標本と，喜瀬の女性2名からの情報（二枚貝類）

和名	学名	生息地 内湾干潟	生息地 サンゴ礁周辺	方名[1] 加藤	方名[1] 浜	利用法[2] 加藤	利用法[2] 浜	標本収集地[3]
フネガイ目（二枚貝綱）								
フネガイ科								
エガイ	*Barbatia lima*		○	ユガグチンニャ	—			Y,(K, b, ts)
オオカリガネエガイ	*Barbatia foliata*	○	○	ユガグチ	ヨガグチ			瀬戸内
オオタカノハ	*Arca ventricosa*		○	(タカノツメ)	—			瀬戸内
リュウキュウサルボウ	*Anadara antiquata*	○	○	—	ヨガグチ？		○	瀬戸内，(K)
イガイ目（二枚貝綱）								
イガイ科								
ヒバリガイモドキ	*Hormomya mutabilis*	○		—	—			Y,(K,瀬戸内)
ホソスジヒバリ	*Modiolus philippinarum*	○		ギシキョウ	ギシキョ	○	○	T，(K)
ウグイスガイ目（二枚貝綱）								
ハボウキガイ科								
イワカワハゴロモ	*Pinna muricata*	○	○	ヒョウガイ	ヒュウガ		×	Y，(K)
ハボウキガイ	*Pinna bicolor*	○		ヒョーガ	—	○■		瀬戸内
ムラサキタイラギ	*Atrina vexillum gouldii*	○	△[4]	ヒョーガ	—	○■	○	T
ウグイスガイ科								
クロチョウガイ	*Pinctada margaritifera*		○	—	(クロチョウガイ)	■	■	K
マクガイ科								
シュモクアオリガイ	*Isognomon isognomum*	○	○	クロシャミセン	—			K
カキ目（二枚貝綱）								
イタボガキ科								
オハグロガキモドキ	*Saccostrea cucullata*	○		カキ，ウタンコ	カキ	○		T，(K，Y)
マガキ	*Crassostrea gigas*			カキ	—			T，(K，b)
ウミギクガイ科								
メンガイ	*Spondylus squamosus*	○	○	—	—			K, ts, (瀬戸内)
マルスダレガイ目（二枚貝綱）								
ツキガイ科								
ツキガイ	*Codakia tigerina*		○	—	—			b，(ts)
キクザルガイ科								
カネツケザル	*Chama iostoma*		○	ウタンコ	—			ts
シロザル	*Chama brassica*	○	○	ウタンコ	ウタンコ	○	○	瀬戸内,(K,T,Y)
ザルガイ科								
カワラガイ	*Fragum unedo*	○		マシュッコレ	マシュッコレ	○	○	K，(T，b)
ボタンガイ	*Fulvia australis*	○		—	—			K,(T,瀬戸内)
リュウキュウザルガイ	*Regozara flavum*	○		オンナマシュッコレ	—			K
シャコガイ科								
ヒメジャコ	*Tridacna crocea*		○	—	アスカヤ			K，(b)
チドリマスオガイ科								
イソハマグリ	*Atactodea striata*		○	ハマグリ	ハマグリ		○	T，(K)
クチバガイ	*Coecella chinensis*	○		—	—	×		T，Y，瀬戸内
バカガイ科								
リュウキュウバカガイ	*Mactra maculata*		○	—	—			K
ニッコウガイ科								
サメザラ	*Scutarcopagia scobinata*		○	—	—			ts，b
ニッコウガイ	*Tellina virgata*	○		スナンニャ	(ヒメニッコウガイ)	×	×	K，T
ヒラザクラ	*Tellina ovalis*	○		—	(ヒカンザクラガイ)		×	T，(瀬戸内)
リュウキュウシラトリ	*Quidnipagus palatam*		○	アサリ	—			b，(K，ts)
シオサザナミガイ科								
マスオガイ	*Psammotaea elongata*	○	○	ツブフ	ツブフ	○	○	K,(Y, b, ts)
リュウキュウマスオ	*Asaphis violascens*	○	○	ヒュンニャ	ヒュンニャ	○	○	Y,(K, b, ts, 瀬戸内)
キヌタアゲマキ科								
ホソズングリアゲマキ	*Azorinus minutus*	○		—	(マスオガイの一種)			瀬戸内,(K,T)

シジミ科								
シレナシジミ	*Polymesoda erosa*			—	—			住用
マルスダレガイ科								
アサリ	*Ruditapes philippinarum*			アサリ	(リュウキュウアサリ)			T，(K)
アラスジケマン	*Gafrarium tumidum*	○		イシンニャ	イシンニャ	○	○	T，(K，Y，瀬戸内)
アラヌノメ	*Pteriglypta reticulata*		○	(アカガイの種類)	—			ts，(瀬戸内)
イオウハマグリ	*Pitar sulfreum*	○		コウバクニャ	(コウバクンニャの子ども)			T，(Y)
オイノカガミ	*Bonartemis histrio histrio*	○	○	—	スナンニャ			K，(T)
スダレハマグリ	*Katelysia japonica*	○		ハンニャ	ハンニャ	○	○	K，(T，瀬戸内)
ヌノメガイ	*Periglypta puerpera*		○	—	—			瀬戸内
ヒメアサリ	*Ruditapes variegatus*	○	○	アサリ	マサゴ	○		T，(K，Y，b)
ヒメリュウキュウアサリ	*Tapes belcheri*	○	○	アサリ	(リュウキュウアサリ)			T，(K)
ホソスジイナミ	*Gafrarium pectinatum*		○	イシンニャ	(ケマンガイ)			b
ユウカゲハマグリ	*Pitar citrinum*	○		コウバクニャ	コウバクンニャ	■	○■	K
リュウキュウアサリ	*Tapes literatus*	○	○	ヒュンニャ	(リュウキュウアサリ)	○		K，(瀬戸内)

1）（　）内は，標準和名や水産物商品名にもとづき，純粋な方名ではないと思われる名称。「ンニャ」は貝を意味する接尾辞で，これが省略可能なことを確認できた場合は〔　〕に入れて示した。
2）○：食用，△：食用だが自分は食べない，×：おいしくない，■：食用以外の利用（本文参照）
3）K：喜瀬，T：手花部，Y：屋入，b：辺留，ts：土浜（図1参照）。大文字は笠利湾内，小文字は外洋に面した場所。他の収集地は町村名で示した。（　）内は，聞込みで用いなかった標本の採集地。
4）サンゴ礁に生息するのは，クロタイラギ。亜種であるムラサキタイラギは内湾干潟に生息する。

藤さんの御主人)。食用。ウニをとっていた時代にはウニと一緒に煮て食べた（浜)。

ザルガイ科の**カワラガイ**はトリガイの仲間で，アマモの生息する砂礫地などになかば埋もれて生息する。浜さんは，この貝のことを「喜瀬が元祖の貝」と言っていた。他の集落には少ないが喜瀬には多かったという意味であろう。方名中の「マシュ」は「潮」の意で，人が通るとこの貝は潮をはねる。「マシュッコレ」は「潮食らい」の意味だと思われる（浜)。ゆがいてから身をとり，酢の物や炒め物，おつゆなど「何にでも使える」(加藤)。しかし近年は，名瀬市方面の人がこの貝を好んで採りに来るためか，数が少なくなったし，大きくもならない（浜)。

シオサザナミガイ科の貝類は，泥や砂礫の下に身を隠して生息する。表に掲げた2種はいずれも食用になるが，多量の泥を含む。**リュウキュウマスオ**は「砂が入る袋を持っている」(加藤）ので，一晩水に漬けたのち（加藤)，身をとってもう一度泥を洗い流さなければならない（加藤，浜)。身をとってから泥を洗い流さなければならないのは**マスオガイ**も同様である(加藤，浜)。リュウキュウマスオの方名に含まれる「ヒュー」とはシイラのことで，シイラ釣りの餌にはこの貝が用いられた（加藤)。リュウキュウマスオは，白のほかに淡いピンク，淡い紫などの色彩変異があり，見慣れない人には別種に見えることがある。この点を考慮して，エリシテーションの際には色ごとにまとめて別々に提示したが，いずれも同じ種であることを2人は言い当てた。

マルスダレガイ科の貝類はハマグリなどと同じ仲間であり，やはり泥や砂礫の中に生息する。**アラスジケマン**は「ハンニャ（スダレハマグリ）と同様に味噌汁の実として一般的」で（浜)，「肝臓や腎臓によい」(加藤)。この貝もよく利用されていた。浜さんは，小学生のとき，満州から引き上げてきた家族の母親がこの貝ばかりを集めていたのをよく覚えている。他の人たちが他の貝やウニなどを探すなかで，その人は，手近にとれるアラスジケマンだけをもっぱら採っていたというのである。**スダレハマグリ**も，「貝類はみな肝臓や腎臓によいが，この貝はとくによい」(加藤）といわれる。この貝は年々少なくなってはいたが，筆者が浜さんと一緒に貝を探した時にはまったく採れなかったので，浜さんはひどく驚いていた。逆にいえば，それだけ身近な貝だったといえる。**ユウ**

カゲハマグリも「ハンニャと同様におつゆにする」（浜）が，２人が強調していたのは容器としての用途だった。浜さんによれば，方名中の「コウバク」とは，豚味噌や魚味噌[18]を入れる容器を指す。加藤さんによれば，味噌のほか膏薬などもこの貝に入れて保存していた。

このように，二枚貝の生態や利用に関しても，この２人の知識は非常にきめ細かなものであることがわかる。しかし，すべての二枚貝についてそうであるというわけではなく，以下に述べるように，喜瀬の近くで見かけるいくつかの種に関して情報が食い違うのは意外であった。

ザルガイ科の**リュウキュウザルガイ**は，カワラガイと同様に「マシュッコレ」であり，そのうちのメスであると加藤さんはいう。いっぽう浜さんは，カワラガイとリュウキュウザルガイがオスとメスの関係にある（ただしどちらがオスでどちらがメスかはわからない）にもかかわらず，リュウキュウザルガイはマシュッコレと呼ばないという。マルスダレガイ科の**ヒメアサリ**も，方名に関する一致がみられなかった。イタボガキ科の**オハグロガキモドキ**，チドリマスオ科の**イソハマグリ**，マルスダレガイ科の**リュウキュウアサリ**などは，食用にするかどうかで違いがあった。筆者の確認が足りなかったためともいえるが，エリシテーションをおこなったとき，インフォーマントは他の用途の説明などに気を取られていたわけではなかった。食用種としてはあまり重要でないのかもしれない。ただし加藤さんによれば，ヒメアサリやリュウキュウアサリは，おつゆにすると貧血の予防になる。

また，ハボウキガイ科の**ムラサキタイラギ**は，円を六つ切にした扇形の貝で，扇の頂点を下にして突き刺さるように浅い水底に埋在している。貝柱が美味だが（加藤），固いので圧力鍋で炊く（浜）。この貝が食用になることは知られており，浜さんも「見つければとる」と言うにもかかわらず，彼女はその方名や標準和名を知らなかった。なお，この貝は，加藤さんが食器として利用しているクロタイラギ（「聞き込み対象者」の節を参照）の亜種で，喜瀬には両種が混在している[19]。加藤さんは両種を区別していないように見受けられた。

このように，同じように身近に見かける二枚貝類であっても，それをよく知る人とそうでない人がいる。これはおそらく，それぞれのインフォーマントが異なったかたちで干潟と関わっていることをあらわしているのだろう。しかし，同じ性別・世代の加藤さんと浜さんにおいてなぜこのような違いが生じるのか，今回の調査では明らかにできなかった。

ただひとつ指摘しておきたいのは，二枚貝類は砂礫の中に埋在するため目につきにくく，それに関心を持つ人と持たない人のあいだでは知識の差が大きいと予想されることである。たとえば，マルスダレガイ科の**ヌノメガイ**について，浜さんは次のように述べる。「この貝は殻しか見たことがなかったが，ある年にだけ，実の入った貝がたくさん浜に出てきていた。暑い夏だったので煮られて下から出てきたのだと思う。」ふだんから貝殻に注意していなければ，こうした細かな観察はできないだろう。二枚貝類は，干潟種であるからといって干潟全体にまんべんなく分布するわけでなく，底質の粒径などに制約されて局在することが多い。このため，関心の対象とされない二枚貝類は，見つかっても気を引かないというだけでなく，見つかる機会がそもそも稀だという可能性もあるのである。このため，イガイ科のヒバリガイモドキやザルガイ科のボタンガイ，チドリマスオガイ科のクチバガイなど，干潟に生息するにも関わらず方名が知られていない種もある。貝類知識を記載するうえでは，貝類の生態に由来するこうした特徴にも留意することが必要だろう。

❹……結果2　他のインフォーマント3名による追加情報

喜瀬の2名による情報をさらに要約し，他の3名のインフォーマントによる情報と比較したものを表4に示した。喜瀬の2名からの情報を総合すれば，他のインフォーマントから寄せられた情報の大部分をカバーできる。これは，喜瀬の2名が貝類に関してとくに豊富な知識をもっていることを裏づけていよう。しかし，喜瀬の2人とは違った情報が他の3人によってもたらされることも少なくない。その理由のひとつは，それぞれのインフォーマントがまったく違った点に着目していることによる。

村本さんは，貝の生息する場所や微細な環境について言及することが多かった。方名については自信なさげなこともあったが，そのこと自体は彼の知識の乏しさを示すわけではない。また，喜瀬の2人は食用以外の用途を言い忘れることが多かったように思われるのに対し，村本さんはこの点によく気づいてくれた。たとえばスイショウガイ科の**クモガイ**は，ブロック塀の上に並べると魔除けになるという。これは，「縁起がよく，魔除けになる」という田畑さんの語りに一致する。しかし，喜瀬の2人がそのことをまったく知らないとは思えない。加藤さんもまた，この貝やその仲間のスイジガイを縁側に吊るしていたからである。また，村本さんは，**イモガイ**の仲間が独楽遊びに用いられていたことを教えてくれた。

山田さんは，提示された貝を図鑑と照合して同定することに熱心であった。このため，山田さんから得られた情報量は相対的に少ない。しかし，図鑑を見ずに彼女が語ったことは，彼女の経験に即したものであり，そのぶん信頼度が高い。たとえば，食用になると彼女が指摘したのは**ミドリシャミセンガイ**，**スイショウガイ**，**ホソスジヒバリ**，**スダレハマグリ**のみであったが，これらの動物は，山田さん自身が身近な食材として利用してきたものであった。興味深いのは，喜瀬で食用とされていなかったスイショウガイが含まれていることである。山田さんと同じ手花部に住む村本さんもこれを食用だと言い，「店で売っているトゥビンニャ（マガキガイ）と違い，〔スイショウガイは〕この海でしかとれない。昔は近くにいて，歩いていても感触でわかった。」と述べている。手花部では，この貝が喜瀬よりも容易に入手でき，頻繁に利用されていた可能性が高い。また，村本さんと山田さんは，**ムラサキタイラギ**をオウギンニャ，**アラスジケマン**をカキンニャと呼んでいる。手花部と喜瀬では，これらの貝の一般的な呼び名が異なる可能性を指摘できよう。

田畑さんは，多くの二枚貝類を単に「二枚貝」と呼んでいることからわかるように，二枚貝類に関して詳しくなかった。しかし，ミミガイ科の2種を両方認知していることや，アクキガイ科の数種を認知していることなどからみて，干潟の貝類より外洋に面した場所の貝類により詳しいといえる。

表4において各インフォーマントの個性がもっともよくあらわれているのは，アクキガイ科とマルスダレガイ科の貝類である。これらのグループは多数の種を含んでいるが，タカラガイ科やイモガイ科，フネガイ科のようにひとつのグループとして認識されているのではなく，複数のまとまりとして認識されている。こうしたグループでは，近縁種が多く特徴が際立ちにくいいっぽうで，共通の属性によってひとつの方名を与えることもできない。いわば，それ自体としても他の貝との関

表4　5名のインフォーマントの生物知識の比較

和名	方名[1]				利用法			
	喜瀬の2名[2]	村本	山田	田畑	喜瀬の2名[3]	村本[4]	山田[4]	田畑[4]
腕足動物門								
ミドリシャミセンガイ	［ツメックヮ］	ツメ〔ンニャ〕	ツム	—	◎	○	○	
節足動物門								
カメノテ	トゥリンツムン	ウシンツメ	トゥリヅム	—	○			
棘皮動物門								
ナガウニ	［ガスツ］	ユン	ユン	ユン	◆			■
軟体動物門　多板綱								
新ヒザラガイ目								
クサズリガイ科								
ヒザラガイ	ギズマ	ギズマ	グズマ	—	◎			
軟体動物門　腹足綱								
カサガイ目								
ツタノハガイ科								
オオベッコウガサ	ナブンニャ	ナブェンニャ	—	ナブンニャ				
古腹足目								
ミミガイ科								
イボアナゴウ	トコブシ	—	—	トコブシ	○			○
ミミガイ	ヌズリンニャ	トコブシ，ユリンニャ	ヌズリンニャ	ヌズルー，ユリックヮンニャ				○
アマオブネガイ科								
アマオブネ	マナツ，マラツ	マナツンニャ	マナツ	マラツンニャ	◎			○
マルアマオブネ	マナツ，マラツ	マナツンニャ	—	—				
ニシキウズガイ科								
サラサバテイ	［アンサレ］	—	（タカセ）	—	○	○		
ニシキウズ	タマンニャ，アンサレ	—	—	ワックヮンニャ	○			○
リュウテンサザエ科								
カンギク	シャダリ	シャーダリンニャ	シャダリ〔ンニャ〕	—	◎	○		
チョウセンサザエ	カタンニャ	カタンニャ		サザエ	○	○		
盤足目								
オニノツノガイ科								
オニノツノガイ	（オニノツノ，ウシノツノ）	キセル	—	—	○			
スイショウガイ科								
クモガイ	［マヤンニャ］	マヤンニャ	マヤンニャ	ウシクヮンニャ		■		■
スイショウガイ	［オンナトゥビンニャ］	シロトゥビンニャ	シロトゥビンニャ	トゥビンニャ		○	○	
マガキガイ	［トゥビンニャ］	トゥビンニャ	トゥビンニャ	—	○			
タカラガイ科								
キイロダカラ	ビッキャ	—	ビッキャンニャ，ビッキャムック	ムック〔ンニャ〕	○◆			
ハナマルユキダカラ	クロムック，サデムク	ムックン	—	クルシビ	◆			○
ハナビラダカラ	［ムック］	ムックンニャ	ムックンニャ	シビンニャ	○	■		
ヤクシマダカラ	（ヤクシマダカラ）	ムックンニャの一種	—	ウシクヮ〔ンニャ〕				
タマガイ科								
ホウシュノタマ	アヤハキ	—	—	—	◎	△		
フジツガイ科								
ホラガイ	ブランニャ	（ホラガイ）	ブランニャ	ブランニャ，ブラクヮンニャ	■	■		
新腹足目								
アクキガイ科								
アカイガレイシ	［スンニャ］	—	—	—		×		
ガンゼキボラ	［スンニャ］	—	—	—	○			
シラクモガイ	［ガブンニャ］	—	—	ツノンニャ	○			
ツノレイシ	［ガブンニャ］	—	—	ツノンニャ		×		

テツレイシ	[ガブンニャ]	—	—	—		△		
ホソスジテツボラ	[スンニャ]	—	(ホソスジテツボラ)	—	△			
ムラサキイガレイシ	[スンニャ]	—	—	ナキヅランニャ				○
オニコブシガイ科								
オニコブシ	[ガブンニャ]	ウタンコ？	ブトゥ	—		○		
コオニコブシ	[ガブンニャ]	—	—	—				
イトマキボラ科								
イトマキボラ	クワルンニャ, [シュカックゥ]	—	—	—				○
イモガイ科								
クロザメモドキ	[ブトゥンニャ]	—	ブトゥ	ブトゥンニャの種類				
マダライモ	[ブトゥンニャ]	ブトゥ	—	ブトゥンニャ		■		
ミカドミナシ	[ブトゥンニャ]	ブトゥンニャ	ハブガイ	ブトゥンニャの種類				
収柄眼目								
ドロアワモチ科								
イソアワモチ	コーム	トコブシ	ナマコ	コーム	◎			
基眼目								
カラマツガイ科								
コウダカカラマツ	[トンガリンニャ, カサ]	—	—	—	◆			
柄目目								
アフリカマイマイ科								
アフリカマイマイ	アメリカマイマイ	—	—	アフリカマイマイ				
軟体動物門　二枚貝綱								
フネガイ目								
フネガイ科								
エガイ	[ユガグチ]	—	—	(スーサガリ)				○
オオカリガネエガイ	ユガグチ	—	—	二枚貝の種類				
オオタカノハ	[(タカノツメ)]	—	—	—				
リュウキュウサルボウ	[ヨガグチ？]	—	—	—	○			
イガイ目								
イガイ科								
ヒバリガイモドキ	—	—	—	ギシキョの種類				
ホソスジヒバリ	ギシキョ	—	ギシキョ	ギシキョの種類	◎		○	
ウグイスガイ目								
ハボウキガイ科								
イワカワハゴロモ	ヒョウガイ, ヒュウガ	オウギンニャの小さいの	—	ホタテガイ	×		×	
ハボウキガイ	[ヒョーガ]	オウギンニャ	オウギンニャ	オウギンニャ	○◆			×
ムラサキタイラギ	[ヒョーガ]	オウギンニャ	オウギンニャ	オウギンニャ	◎◆			×
ウグイスガイ科								
クロチョウガイ	[(クロチョウガイ)]	—	—	—	■			
マクガイ科								
シュモクアオリガイ	[クロシャミセン]	—	—	—				
カキ目								
イタボガキ科								
オハグロガキモドキ	カキ, [ウタンコ]	—	—	ウタンコ	○			△
マガキ	[カキ]	ガッキ？	—	ウタンコの種類				
ウミギクガイ科								
メンガイ	—	オウギンニャ	—	ウタンコの種類		○		
マルスダレガイ目								
ツキガイ科								
ツキガイ	—	—	ツキガイ	二枚貝				
キクザルガイ科								
カネツケザル	[ウタンコ]	—	—	ウタンコ				△
シロザル	ウタンコ	タンコ	—	ウタンコの種類	◎	○		

ザルガイ科								
カワラガイ	マシュッコレ	マッシュンニャ	マシュッコレ	二枚貝	◎			
ボタンガイ	—	マスンニャの小さいの？	—	—				
リュウキュウザルガイ	[オンナマシュッコレ]	マシュンニャの一種？	マシュッコレ	—				
シャコガイ科								
ヒメジャコ	[アスカヤ]	ウタンコ？	スワリンニャ	スワルンニャ		○		
チドリマスオガイ科								
イソハマグリ	ハマグリ	ハマグリ	ハマグリ	—	○			
クチバガイ	—	—	—	ハマグリ	×			
バカガイ科								
リュウキュウバカガイ	—	—	—	二枚貝				
ニッコウガイ科								
サメザラ	—	—	—	二枚貝				
ニッコウガイ	[スナンニャ]	—	—	—	×	○		
ヒラザクラ	[(ヒカンザクラガイ)]	サクラガイ？	—	—	×			
リュウキュウシラトリ	[アサリ]	—	—	二枚貝				
シオサザナミガイ科								
マスオガイ	ツブフ	—	—	スーサガリ	◎	×		○
リュウキュウマスオ	ヒュンニャ	カッキンニャ	ヒンニャ	—	◎			×
キヌタアゲマキ科								
ホソズングリアゲマキ	[(マスオガイ)]	—	—	—				
シジミ科								
シレナシジミ	—	—	マングローブ貝	—				
マルスダレガイ科								
アサリ	[アサリ]	アサリ？	—	二枚貝				
アラスジケマン	イシンニャ	カッキンニャ	カキンニャ，イシンニャ	二枚貝	◎			
アラヌノメ	[(アカガイ)]	カッキンニャの一種	—	—				
イオウハマグリ	コウバクンニャ	ハマグリ？	—	—				
オイノカガミ	[スナンニャ]	—	—	二枚貝				
スダレハマグリ	ハンニャ	ハマグリの一種	ビスキンニャ	—	◎		○	
ヌノメガイ	—	—	—	—				
ヒメアサリ	アサリ，マサゴ	アサリ？	アサリ	—	○			
ヒメリュウキュウアサリ	[アサリ]	—	—	—				
ホソスジイナミ	[イシンニャ]	カッキンニャの一種	—	—				
ユウカゲハマグリ	コウバクンニャ	マスンニャだが少し違う	—	—	○■			
リュウキュウアサリ	[ヒュンニャ]	—	—	—	○			
軟体動物門　頭足綱								
コウイカ目								
コウイカ科								
コウイカまたはコブシメ	[クブシムン]	コボシメ	クブシュム	(コウイカ)				

1）（　）内は，標準和名や水産物商品名にもとづき，純粋な方名ではないと思われる名称。「ンニャ」は貝を意味する接尾辞で，これが省略可能なことを確認できた場合は〔　〕に入れて示した。村本氏の列にみられる網かけの欄は，夫人による情報であることを示す。
2）2人の情報に食い違いがある場合，両方を併記したが，発音の違いと判断できる場合はどちらか一方を記した。一方からの情報しかない場合は，［　］に括って示した。詳しくは表1～表3を参照。
3）◎：食用（2名による言及），○：食用（1名のみによる言及），×：非食用，■：食用以外の利用（2名による言及），◆：食用以外の利用（1名のみによる言及）。詳しくは表3を参照。
4）○：食用，△：食用だが自分は食べない，×：おいしくない，■：食用以外の利用（本文参照）。村本氏の列にみられる網かけの欄は，夫人による情報であることを示す。

連のうえでも覚えにくい貝なのであろう。このため，このグループに詳しい人はそれぞれの違いを詳しく説明できるのに対し，詳しくない人はわずかの知識しか持っていない。

田畑さんがアクキガイ科の貝類に詳しいのは，外洋に面したサンゴ礁周辺の貝類になじんでいるからであり，逆に村本さんや山田さん，浜さんがマルスダレガイ科の貝類に詳しいのは，干潟の貝類になじんでいるからだろう。両方に詳しい加藤さんは，かなり広い領域において貝類知識をもっているといってよい。

❺……考察

貝類知識の個人的偏差：知識の核心と周辺

加藤さんと浜さんはともに女性で年齢も近く，貝集めを趣味としながら貝類の知識を増やし続けるという共通点をもっている。このため，２人の知識は重なり合う部分が大きく，この世代の喜瀬在住女性の貝類知識として提示してもそれほど無理がないだろう。しかし，得意分野の微妙な違いや，なじみのない貝に出会ったときの反応の違いに着目してみると，喜瀬の海に対する人びとの関わりが多様であることをあらためて認識できる。

加藤さんは，外洋に面するサンゴ礁周辺に多いアクキガイ科の貝の方名をよく知っていた。これは明らかに，自分の居住地の周辺だけでなく，笠利町の東側の集落における貝類利用にも通じているからである。また，浜さんは，肥料として用いるウニを東側の海岸まで採りに行ったと証言している。これらのことから，次のようにいえるだろう。喜瀬の人びとは，内湾干潟の貝類を身近な資源として利用し，それらに関する知識を広く共有している。しかしそれだけでなく，遠方における他の海岸環境の貝類に関しても，身近に見られる貝類と比較しながら知識を蓄え，ときには積極的に利用した。

内湾干潟の貝類に関する知識は，喜瀬における貝類知識のいわば核心的な部分である。これに対し，他の貝類知識は，必ずしも共有されているわけではない[20]。核心的でなく共有されていないという意味で，以下ではこうした知識を「周辺的」と呼んでおこう。貝類に関して人並みならぬ関心をもつ２人は，かなりの程度まで周辺的な知識も身につけているといってよい。

周辺的知識には，遠方の海岸に出かけることによって得られる知識のほか，貝類図鑑や放送メディアなどから得られる知識がある。喜瀬で見かけにくいアクキガイ科の貝類は，東海岸で知られる方名のほか，図鑑に記載される標準和名によって指示されていた。とくに浜さんが標準和名をよく用いていたが，アクキガイ科にかぎらず貝類全般についていえば，加藤さんや山田さんも標準和名に精通している。このことは，室内装飾用に貝を集めるのが流行していることと無関係ではなかろう。たとえば加藤さんは，日本では入手しにくいマンボウガイなどを室内に飾っているが，これは，自分の集めた貝と交換してもらったものである。こうした他地域における貝類にまで興味を広げるなら，図鑑によって得られる知識の効用は大きい。また，浜さんは，集めた貝殻の一部を図鑑で同定し，標本ラベルを貼るのに熱中していたことがある。さらに，図鑑や放送メディアによる知識は，核心的知識の対象である身近な貝類に対しても別な見方を与えてくれる。ミドリシャミセンガイの稀少性についての認識は，これらの媒体によって得られたものである。

核心的な知識は，身近な海を舞台としてさまざまな活動にたずさわるなかで，直接的な経験として獲得していくものである。これに対して周辺的な知識は，居住地からやや離れた自然に親しんだり，遠方から来た人の話を聞いたり，遠方の専門家が編んだ図鑑を読んだり，あるいはテレビを見たりすることで得られる。核心的な知識の形成には，身近な自然や人びととの継続的かつ反復的な交渉が関わっており，周辺的な知識とはこの点が異なっている。周辺的な知識が獲得される回路は

多岐にわたっているが，いずれかの回路が他に優越しているわけではない。だからこそ，アクキガイ科の貝類は，他地域で通用する名称でも標準和名でも呼ばれうるのである。

核心的知識と周辺的知識は，このような獲得過程の相違から区別すべき対概念であるが，実際には両者は，共有度の高い知識と高くない知識の対比としても提示できる。どちらの対比を強調するかは場合によるが，筆者らは原則として，獲得過程の相違のほうを重視したい。これは，ムラサキタイラギの方名や，リュウキュウザルガイとカワラガイの関係など，いくつかの二枚貝類に関する知識のゆらぎをどう捉えるかに関わっている。これらの貝類は，明らかに喜瀬の内湾干潟に多く生息する種類であり，核心的知識の対象となってよいはずである。それにもかかわらず知識として共有される度合いが低いのは，干潟のなかで局所的に埋在し，人目につく機会が少ないからであろう。つまり，距離的には身近であるのに，人目につきにくいため疎遠な位置づけにあるのである。しかし，人目につきにくい貝類がすべて疎遠な位置づけにあるとはかぎらない。二枚貝類は一般に人目につきにくいが，広く知られている場合も少なくないからである。現在は疎遠な位置づけにある貝類も，その生態が知られるようになったり商品価値が高まったりすれば，将来的にはより身近になる可能性があろう。したがって，身近に生息していても認知度が低い貝類は，潜在的に，核心的知識の対象たりうると位置づけておいたほうがよい。

また，核心的知識と周辺的知識は，あくまで相対的な対概念であり，上で示したように両方の性格を併せもつ知識もある。だが，身近な海と関わっていればけっして看過されえない知識として，とくに中核的なものがあることは否定できない。喜瀬においては，ヒザラガイ，アマオブネ，カンギク，タカラガイ類，ホウシュノタマ，イソアワモチ，ホソスジヒバリ，シロザル，カワラガイ，マスオガイ，リュウキュウマスオ，アラスジケマン，スダレハマグリ，ユウカゲハマグリなどに関する知識が，とくに中核的な位置を占めているといってよいだろう。貝類以外では，ミドリシャミセンガイも含まれる。このリストは，2人のインフォーマントにおける知識の一致度と，喜瀬干潟での見つけやすさを考慮して確定した。あくまで暫定的なものなので，今後の資料蓄積によって修正される可能性もあるが，喜瀬干潟の社会的重要性を推し量るうえで参考になろう。

貝類知識の個人的偏差：性差と世代差，地域差

次に，知識の性差と世代差について見てみたい。喜瀬の2人による知識を基準として，村本さんと比較することで性差を，山田さんと比較することで世代差を読みとることも，あるいは可能かもしれない。しかし本研究では，詳しい考察に耐えるほどの資料は得られなかった。知識差の原因を特定するには，考慮すべき要素が多すぎるからである。せめて，村本さんや山田さんのような手花部在住者でなく，喜瀬在住の男性と喜瀬在住の若年女性を比較対象とすべきであった。

しかし，女性のほうが貝類の方名に詳しいというような，すでに指摘されてきた傾向［松井 1989：107-108］は，これまでの結果からも傍証される。表4をみると，村本さんが質問に答える際，同じ手花部出身である夫人がしばしば「助太刀」に入っていることがわかる（網をかけて示した欄）。これに対して，加藤さんの夫や山田さんの夫は，村本さんの妻と同じようにエリシテーションに同席していたにもかかわらず，口を出すことがほとんどなかった。山田さんの夫は他県出身なので控

えめだったのかもしれないが，すべての女性がエリシテーションに対して積極的に反応したことは印象的だった。このことは，松井の指摘するとおり，浅い海で貝拾いに従事するのがしばしば女性であることと関係しているのだろう。

ただし，方名以外の貝類知識に関してみた場合，男性である村本さんの知識が乏しいとはけっしていえない。ニッコウガイやマスオガイを食用とするかどうかという点などについては議論の余地があるものの，貝の用途，とりわけ食用以外の用途について，村本さんは多くの情報をもたらしてくれた。また，表には掲載しきれなかったが，生息場所に関する情報も多く，適切であった。また，喜瀬の2人にとって明確に核心的知識を占める貝類の方名に関しても，喜瀬の2人（または，同じ手花部の山田さん）と多くの一致が見られた。

村本さんと手花部の海の関わりは，ほとんど，小学校から中学校にかけての約10年間に集中している。この間の経験が，いかに濃密であったか理解できよう。ただ，村本さんは，結婚後も干潟のそばに住み続けた他のインフォーマントとは違い，長年にわたって貝拾いを続けてきたわけではない。このため，自分のもつ知識を仲間のもつ知識と比較し，自分の知識の細部を補強したり修正したりする機会は少なかった。方名に関して自信なさげに答えることがあったのも，このためであろう。村本さんは，自然との関わりにおいてあるていど正確な知識をもちながらも，それを社会的に共有されたかたちに鋳直す機会が少なかったのである。

いっぽう知識の世代差に関しては，世代間における知識継承が不全をきたしているような傾向［松井 1989：108–109，120］を明確に認めることはできなかった。もっとも若年である山田さんが回答した方名の数は，加藤さんらより若干少ないかもしれないが，これは，知らないものに関して慎重な態度をとった結果ともいえる。回答のあった種について見てみると，山田さんの情報は喜瀬の2人によく一致しており，男性である村本さんより確実に知識を継承しているといえよう。ただし，全般的な傾向として世代間の継承が確実におこなわれているかどうかは，山田さんの例からだけではわからない。とくに若年世代に関して，より詳しく調査する必要があろう。

山田さんのように，たとえ回答数が少なくとも確実なことだけを答える回答者は，核心的知識の範囲を確定するうえで重要な参考になる。しかし，手花部におけるこの作業は今後の課題であろう。

喜瀬と手花部は，集落の前浜がいずれも内湾干潟になっている。喜瀬干潟のほうが大規模だが，生物相の類似度が高いことから，喜瀬の2人も村本さんも山田さんも知識の一致度が高い。この点，田畑さんは，居住地の前浜が外洋に面したサンゴ礁であるためか，まったく異なった過程で知識を獲得してきたようにみえる。とくに，オオベッコウガサやミミガイ類など波の荒い岩礁に多い貝類や，サンゴ礁原に多いアクキガイ科の貝類などが，知識の中核をなしているのではなかろうか。この点についても，今後，資料を増やしていくなかであらためて論じていきたい。

なお，喜瀬と手花部の環境が類似しているからといって，両地区の知識がまったく同じであると考える必要はない。核心的知識は，たしかに自然との直接的な対峙をとおして獲得されるが，同時に，隣人からの情報によって補強されたり修正されたりもする。喜瀬と手花部は岬によって隔てられるため，社会的交渉が相対的に少なく，それぞれ独自の知識が発達したと考えても無理はない。スイショウガイに関する喜瀬と手花部の差異は，干潟の広さや生物相の違いだけでなく，こうした社会的要因に由来する可能性もある。また，ムラサキタイラギやアラスジケマン，スダレハマグリ

なども，集落ごとに違った呼び名をもっている可能性がある。これら微妙な差異も，今後の調査の課題である。

エコトーン環境における人-自然関係の研究：多様性の提示から内的構造の理解へ

本稿で示したような，個人的偏差を視野に入れた民俗知識の研究は，人-自然関係の一面をあらわす資料として，今後さまざまな調査地で蓄積するよう期待される。方法論的に洗練すべき余地も少なくないが，本稿では，今後の研究の足がかりを提供できたように思う。それは，個人差への着目によって多様性の構造を明らかにするという方向性である。以下では，干潟生業に関する生態人類学的研究を念頭に置いて議論を進めたい。

生態人類学の分野では，干潟環境の採捕活動が近年数多く取りあげられている。その要因として，干潟環境の縮退という現実と，マイナー・サブシステンスに対する関心の高まりをあげることができよう［篠原 1998；松井 1998］。前者の要因に刺激された研究としては，1997 年に水門を閉鎖して全国的に話題となった有明海の干潟に関する武田らの報告［1998］，武田の参加を得ておこなわれた韓国の干潟に関する研究［李／武田 1999］，李を中心にその後も展開しているカキ採取活動の研究［李／武田 2002；李ほか 2002］などをあげることができる。また，後者の要因に関するものとして，海浜採集活動の「楽しみ」の側面を強調した熊倉の研究[21]［1998］や，長らく昆虫食の調査をおこなってきた野中による干潟動物利用の報告［2000］などをあげることができる。しかし内容的にみると，武田ら［1998］や李／武田［1999］などの研究は干潟生業活動の多様性についての網羅的な記載であり，熊倉［1998］や野中［2000］の研究にきわめて近い[22]。こうしてみると，生態人類学的な干潟研究は，メジャー・サブシステンスであるカキ採取に焦点を絞ったもの［李／武田 2002；李ほか 2002］を除き，干潟生業や捕獲対象動物の多様性の記載にほかならないのである。

こうした傾向は，他のテーマに関する生態人類学的研究に比較すると際立っている。多くの生態人類学的研究では，生業における性分業や個人差，季節性，時間配分や空間的住み分けなどが数量的に分析される。つまり，均質であるかにみえる生業の多様な内的構造が示されるわけである。これは，多様性を提示する干潟生業研究の方向性と同じに見えるかもしれないが，けっしてそうではない。内的構造の提示においては，個人による多様な活動の使い分けや，多様な社会的カテゴリーの相互依存関係など，多様性が全体のなかでいかに配分されているか（あるいは，多様性がいかに統一されているか）ということが問題になる。これに対して干潟生業研究では，多様性の記載にとどまっており，それら相互の関係についてはまだほとんど論じられていないのである。その意味で，干潟生業研究が解明すべき問題領域は，まだまだ多いといわざるを得ない。

ところが，干潟生業研究を今までの生態人類学的方法によって進めようとしても，大きな壁が立ちはだかっている。これは，干潟生業がマイナー・サブシステンス的な性格を強くもつことと関わっていよう。筆者らの観察によれば，男性がタコ採りその他の目的で干潟に出るのは，仕事が早く終わったときや休暇のときが多い。女性も，干潟に出る道連れが見つからなければ，家事その他の仕事に時間を振り替える可能性が高い。つまり，調査者が干潟で遭遇する人たちは，定期的に干潟に出るわけではないという可能性が高い。このため，同一個人の活動を反復して観察したり，そ

れにもとづいて他の個人と比較したりすること自体が難しく[23]，記述の糸口が見いだしにくいのである。おまけに，干潟生業がおこなわれるのは干潟が干出する低潮時（大潮の干潮時）だけであるため，1ケ月の調査をおこなっても2潮すなわち10日程度しか観察できない。さらに南西諸島の場合，昼間における活動は2月頃から8月頃にかぎられる。他の時期には夜の活動を観察せざるを得ないが，広い干潟が見渡せなかったり，追跡による観察に見落としが多くなったりするなど，観察は不十分なものになりがちである。

つまり，直接観察における限界が，干潟生業研究を立ち遅らせているといってよい。調査地によっては，あくまで腰を据えて直接観察を重ねていくべきであろうが，別の方法によるアプローチも試みられてしかるべきである。本稿では，エリシテーション法によって得られた資料にもとづき，個人的偏差をそこなわないかたちで人びとの貝類知識を提示した。自然との関わりにおける個人差を分析することは，生態人類学の基本的な作業であり，生業活動その他の社会的活動における個人の役割や戦略といった考察に結びつく。エリシテーション法は，実際の活動における個人差を直接的に明らかにすることはできないものの，干潟生業活動における個人差を別の側面から照らしだすことになろう。

このほか，核心的知識と周辺的知識の区別が生じる背景をさらに詳しく考察していくことは，人びとが実際に海と関わる場面について，より具体的な知見をもたらすと期待できる。さらに，知識の時系列的な変化を追うことができれば，学習過程や近代化といった問題にも接近できるだろう。こうした可能性は，干潟などのエコトーンにおける生業研究だけでなく，広くマイナー・サブシステンスについての研究一般においても考慮されるべきである。

❻……結論

知識の獲得過程までも視野に入れながら，笠利湾奥部周辺の貝類知識を総括すると，次のようになろう。知識を獲得する手段はいくつもある。しかし核心的な知識は，①身近な海を舞台として，②さまざまな活動に継続的かつ反復的にたずさわるなかで，③直接的な経験としてのみ得られる。それ以外の知識は，個々人により深められることがあるものの，地域的に共有される性質のものではない。

核心的知識の範囲は，第一に自然環境から制約を受けている。自然環境の異なる2つの集落においては，経験として得られる知識が異なるのも当然であろう。だが，それだけではなく，喜瀬と手花部のように，類似の自然環境にある隣接した集落において，知識が異なることもありうる。核心的知識は単に個人的な観察のみによって得られるのではなく，隣人たちとの社会的交渉のなかで補強や修正を受けるからである。とくに，方名に関してはこうした学習過程が無視できない。

今後，民俗学的に貝類知識の調査をする際には，すべての貝類方名が一様の重要性をもっているとはいえないことに留意する必要があろう。また，生態人類学的に人びとと干潟環境との関わりを明らかにしようとする際は，本稿で示した方法論を洗練しながら活用し，人びとと海との関わりの内的構造を明らかにしていく必要があろう。

干潟の利用という観点からは，喜瀬と手花部といった相互に隣接する集落においても，貝類知識

に差異のある可能性が示唆された。小さな干潟でも，人びとは固有のかたちで海との関わりを展開しているといえる。また，干潟は単に伝承の場としてのみでなく，創造の場としても大きな意味をもっている。ユウカゲハマグリのように貝殻が容器として用いられることをヒントに，加藤さんはクロタイラギの大きな殻を食器として用いることを創案した。地域文化の継承だけでなく，創造性という点からも，干潟の社会的価値は評価されるべきではなかろうか。

〔謝辞〕

聞き込み調査に御協力くださった方々に厚く感謝申し上げます。筆者らの勝手な事情により，実名掲載の可否をあらためて確認することができず，やむなく仮名で掲載させていただきました。御好意によるお答えが採点されるような印象を持たれたかもわかりませんが，私たちはむしろ，皆様が海と関わるなかで得られた知識をすべて「正解」と受けとったうえで，この論文をまとめたつもりです。これからも皆様が来訪者にとっての先達となってくださるよう，願ってやみません。

また，調査段階でさまざまな便宜をはかってくださった有馬康文氏（貝類研究家），中山清美氏（笠利町立歴史民俗資料館），前川隆則氏（前川水産），久永トシカズ氏（ハブ捕り名人），外薗哲郎氏（漁業），高梨修氏（名瀬市立奄美博物館）に御礼申し上げます。本研究の遂行にあたっては，トヨタ財団平成13年度研究助成プログラム「琉球列島の干潟における潟生業についての研究――採捕・漁撈活動の場としての干潟を考える」（代表者：長田英己）および日本学術振興会平成13-14年度科学研究費（奨励研究(A)）「沿岸漁民の口頭伝承にもとづく，ローカルな経済史・環境史の構築」（課題番号13710191，代表者：飯田卓）の助成を得ました。関係者に御礼申し上げます。

註

（1）――さらに，これまでの学問的営為が理論的欠陥のために生活者の証言を不当に軽視してきた場合，それをあらためて取り上げることは，ラディカルな現状批判として立ち現れる。篠原［1994］を参照。

（2）――エコトーンのなかでも，とくに干潟の民俗事象を記述する作業は，干潟の面積から予想される以上に多く見積もる必要がある。というのも，干潟の底生生物は地域固有性が強く［和田2001］，人びとと干潟との関わりも地域ごとに多様だと予想できるからである。

（3）――干潟とは，河口域に形成された平坦な砂泥質の海底で，潮位の低下にともない干出するものと定義するのが一般的である［水産庁／日本水産資源保護協会1988］。干潟はさらに，①河川の河口域の前浜に発達する前浜干潟，②河川内にできる河口干潟，③砂洲などによって半ば閉鎖された潟湖の中にできる潟湖干潟，の3つに区分できる。

本稿で述べる内湾干潟は前浜干潟に相当するが，名和［2000］は，琉球列島の前浜タイプの干潟を礁池干潟と内湾干潟に区別することを提唱している。注21を参照。

（4）――1988年，空港は同町の和野地区と万屋地区の中間に移転したが，引き続き，町民の雇用や観光振興のうえで大きな意味をもっている。なお，旧空港の跡地は，田中一村記念美術館など複数の観光施設を擁する観光スポット「奄美パーク」として再利用されている。

（5）――自治組織である区のうえでは，喜瀬は1区から3区までの3つの区に分かれる。人口は3つの区の合計を示す。

（6）――映像人類学の分野では，撮影したフィルムやビデオを関係者に提示しながらおこなうインタビューをエリシテーションと呼んでいる［Krebs 1975］。これは，撮影した事象の背景を知ることが目的である。

（7）――松井［1991：17-18］は，この方法を「コント

ロールされた抽出法（controlled eliciting）」と呼んでいる。

（8）――ただし，環境問題に対する関心が高まるなか，自然と人間との関わりを認識人類学の中心課題として再定位しようとする動きもある［Kempton 2003］。

（9）――これまでの研究のなかでは，松井による知識保有の個人差の研究［松井1983：124-140；1989：106-120］が参考になる。そのなかで松井は，男性が貝より植物に詳しいのに対し，女性が植物より貝に詳しいことなどを指摘している。こうした性差や年齢差に由来する知識量の差異の傾向は，大まかに把握しておくにこしたことはない。しかし同時に，知識量の差を性や年齢といった見えやすい尺度に還元してしまわないことの重要性にも，ここでは注意しておきたい。性や年齢に還元できない知識の差にこそ，生活と海との関わりを見とおすヒントが隠されているかもしれないからである。

(10)――外肛動物であるカヘイイシ，腕足動物であるミドリシャミセンガイ，節足動物であるクロフジツボとカメノテ，棘皮動物であるナガウニとヨツアナカシパンの6種。

(11)――ただし，有明海で多く見られるのは，笠利湾の場合と同じくミドリシャミセンガイである。

(12)――カメノテが生息するのはサンゴ礁ではなく，非石灰岩質の岩礁である。奄美大島では，こうした岩礁がサンゴ礁海岸に接して分布し，その生物相はサンゴ礁と類似する。このため，表中ではカメノテを「サンゴ礁周辺」の種として分類した。

(13)――別の時には，商品名が表示されていなかったものの，やはりアマオブネ科であるニシキアマオブネやヌリツヤアマオブネ，ニシキウズ科のハナダタミやイシダタミなどが，水槽に混ざって入れられてグラム売りされていた。

(14)――このことが表中に反映されていないのは，ハナマルユキダカラやハナビラダカラ，ヤクシマダカラなどの貝をキイロダカラに続けて見せなかったためである。論理的な整合性を求めるなら表中にもこの情報を反映させるべきだろうが，本稿では，語りの内容をできるだけ尊重して，不要な操作は加えなかった。筆者による解釈の箇所をしつこく明示したのも，同じ理由による。

(15)――イソアワモチに類似した種として，内湾にのみ生息するドロアワモチがいる。笠利湾内には両者が混生しているが，多いのはイソアワモチのほうである。

なお，浜さんはイソアワモチがギズマ（ヒザラガイ）の一種であると言い，加藤さんは貝でなくシキリ（ナマコ）の一種だと言う。特異な容貌が人目をひいているものの，分類に関する統一的な見解はないようだった。

(16)――このように考えると，表1で示したミドリシャミセンガイの名称が2人のあいだで異なるのは不自然である。この種は，喜瀬にも比較的多く生息し，その利用法についても詳しく述べられているためである。加藤さんはおそらく，利用法を説明するのに熱心になっていたため方名を言い忘れたのではないだろうか。この点については筆者が注意を喚起するべきだったと反省している。

(17)――ホソスジヒバリは内湾干潟の粗砂底に埋在し，足糸で砂利を束ねて体を固定しながら生息する。いっぽう，近縁種であるリュウキュウヒバリはサンゴ礁域に多く見られ，転石や岩盤に足糸で付着する。浜さんの言述は，ホソスジヒバリとリュウキュウヒバリの両方を観察した結果にもとづいている可能性もあろう。

なお，奄美諸島におけるホソスジヒバリの分布は，笠利湾の内湾干潟に局限される［名和2001］。

(18)――肉や魚の身を小さくほぐして味噌に入れ，調味したもの。奄美大島では，おかずや茶請けとして一般的である。

(19)――クロタイラギはサンゴ礁域に多く見られ，殻長は30～60センチメートルに達する。いっぽうムラサキタイラギは内湾干潟に生息し，殻長は30センチメートル以下。

(20)――沖縄諸島の野甫島で貝類知識を調査した松井［1989：110］は，「方名のほぼ7割程度が島のほとんど全員に知られていて，1割程度はかなり個人的な方名が含まれている」と述べている。この記述から，野甫島における核心的知識の割合は，笠利町の場合よりもはるかに高いという印象を受けるであろう。しかしこの違いは，エリシテーションの方法論に由来すると思われる。松井の調査で用いられた34種の貝類標本は，いずれも方名をもつことがあらかじめ判明していた。

(21)――この研究の調査地は内湾干潟ではなく，外洋に面したサンゴ礁地形（干瀬）である。しかし，内湾干潟というカテゴリー自体がそもそも多様な環境を含みこんでいるし，土木技術の発達によって縮退するエコトーンという意味では，内湾干潟も干瀬も共通している。

ちなみに名和は，干瀬に隣接した礁池［目崎／小橋川1988］に発達するサンゴ砂礫質の干潟を「礁池干潟」と呼び［名和2000］，内湾干潟と同じく前浜干潟の一類型として位置づけている（注3参照）。こうした貝類生態学での問題提起に目を配りながら，生態人類学の分野でも，干潟概念を明確化していくべきであろう。

(22)――武田は，干潟に着目する以前から，多様な生業の展開される自然環境を取りあげてきた。サンゴ礁地形とそれに連なる海は，その一例である［武田 1994］。武田の干潟研究をその延長と考えれば，多様性への強い関心を理解できよう。

(23)――喜瀬干潟で出会ったある老婦人は，「ボケ防止のため」と称して，稀少種ミドリシャミセンガイを掘りに来ていた。かなり目をこらさないと見えない穴を頼りに，素手で土を掘り起こし，次々とミドリシャミセンガイを掘り当てる技量は，少なからぬ経験にもとづくと推測された。しかし，彼女は足腰が弱っていてしばらく干潟には出ておらず，やや年下の女性に連れられて久しぶりに出てきたのだという。こうした老婦人の技量を目撃するためには，頻繁に干潟に出る人に同行するだけではじゅうぶんでないだろう。

ちなみに，付き添いの女性は，ミドリシャミセンガイを掘り当てることがまったくできなかった。

参考文献

秋道智彌　2001　「アジア・モンスーンにおけるエコトーン研究の展望」『東南アジアの湿地帯における資源と経済――開発と保全の生態史的研究』平成10年度～平成12年度科学研究費補助金基盤研究A(2)研究成果報告書　pp. 238-243

入佐一俊　1998　『地名でみる奄美振興事業』鹿児島県立図書館奄美分館所蔵

恵原義盛　1973　「奄美の海――その楽しみと悲しみ」恵原義盛『奄美生活誌』木耳社　pp. 117-228

――　1974　「漁業と習俗」長澤和俊（編）『奄美文化誌――南島の歴史と民俗』西日本新聞社　pp. 138-145

奥谷喬司（編）　2000　『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会

笠利町誌執筆委員会（編）　1973　『笠利町誌』鹿児島県大島郡笠利町

加藤　真　1999　『日本の渚』岩波書店

――　2002　「奄美の渚――生物多様性と神話にいろどられた自然」秋道智彌（編）『野生生物と地域社会――日本の自然とくらしはどうかわったか』昭和堂　pp. 38-56

久保弘文／黒住耐二　1995　『生態／検索図鑑　沖縄の海の貝・陸の貝』沖縄出版

熊倉文子　1998　「海を歩く女たち――沖縄県久高島における海浜採集活動」篠原徹（編）『民俗の技術』朝倉書店　pp. 192-216

篠原　徹　1990　『自然と民俗』日本エディタースクール出版部

――　1994　『海と山の民俗自然誌』吉川弘文館

――　1998　「民俗の技術とはなにか」篠原徹（編）『民俗の技術』朝倉書店　pp. 1-14

水産庁／日本水産資源保護協会　1988　『干潟』水産庁／日本水産資源保護協会

武田　淳　1994　『イノーの採捕経済――サンゴ礁海域における伝統漁法の多様性』九学会連合地域文化の均質化編集委員会（編）『地域文化の均質化』平凡社　pp. 51-68

武田　淳／五十嵐勉／趙慶萬／李應喆　1998　「干潟の水族資源（第1報）　有明海における伝統的採捕技術と多様性」『佐賀大学農学部彙報』83：79-98

龍郷町誌民俗編編さん委員会　1988　『龍郷町誌　民俗編』鹿児島県大島郡龍郷町

田和正孝　2002　「石干見研究ノート――伝統漁法の比較生態」『国立民族学博物館研究報告』27(1)：189-229

寺嶋秀明　2002　「フィールドの科学としてのエスノ・サイエンス」寺嶋秀明／篠原徹（編）『エスノ・サイエンス』京都大学学術出版会　pp. 3-12

寺嶋秀明／篠原　徹（編）　2002　『エスノ・サイエンス』京都大学学術出版会

中山清美　2000　「夜光貝の生息する海と遺跡」高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会（編）『琉球・東アジアの人と文化（上巻）』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会，pp. 175-186

名和　純　2000　「沖縄県における干潟と低湿地の貝類の現状」『特殊鳥類等生息環境調査XI（改訂版）　湿地（水辺環境）編総括――沖縄県内の水辺環境に生息する生物種の概況』沖縄県文化環境部自然保護課　pp. 103-129

――　2001　「琉球列島における内湾干潟の貝類相」*WWF Japan Science Report* 4: 1-44

野中健一　2000　「ベトナム北部における干潟の水産小動物利用」『動物考古学』14：55-68

文化財保護委員会　1972　『有明海の漁撈習俗』平凡社

松井　健　1983　『自然認識の人類学』どうぶつ社

――　1989　『琉球のニュー・エスノグラフィー』人文書院

――　1991　『認識人類学論攷』昭和堂

松井　健　1998「マイナー・サブシステンスの世界――民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹（編）『民俗の技術』朝倉書店　pp. 247-268
目崎茂和／小橋川共男　1988『石垣島白保サンゴの海――残された奇跡のさんご礁』高文研
山下弘文　1989『だれが干潟を守ったか――有明海に生きる漁民と生物』農山漁村文化協会
行田義三　2000『鹿児島の貝』春苑堂出版
李　應喆／武田　淳　1999「干潟の水族資源（第2報）韓国・西海岸咸平湾における伝統的漁撈と採捕活動」『佐賀大学農学部彙報』84：11-27
――　／――　2002「干潟生態系における採捕活動――佐賀県肥前町大浦浜におけるカキの採捕活動を中心に」『地域漁業研究』42(3)：1-26
李　應喆／武田　淳／鈴木廣志　2002「韓国の干潟における伝統的漁撈と採捕――西海岸咸平湾におけるカキの採捕活動を中心にした生態人類学的研究」『人類学雑誌』110(1)：9-25
和田恵次　2001「干潟における底生生物多様性の危機」『日本ベントス学会誌』56：46-48
D'Andrade, Roy　1995. *The Development of Cognitive Anthropology*, Cambridge: Cambridge University Press.
Kempton, Willett　2003. Cognitive Anthropology and the Environment. Carole L. Crumley (ed.) *New Directions in Anthropology and Environment*, Walnut Creek: Altamira Press, pp. 49-71.
Krebs, Stephanie　1975. The Film Elicitation Technique. Paul Hockings (ed.) *Principles of Visual Anthropology*, The Hague: Mouton, pp. 283-302.

飯田　卓（国立民族学博物館，国立歴史民俗博物館共同研究員）
名和　純（潟の生態史研究会，国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者）

（2004年6月30日受理，2005年1月15日審査終了）

Knowledge of Shellfish on the Coast of Kasari Bay, Northern Amami Island: A Description of Human–Nature Relationship through the Elicitation Method

IIDA Taku and NAWA Jun

Since the economic growth in 1950 s, Japanese life has substantially changed in various phases. In particular, relations with nature are still overt to significant changes, owing to nationwide land–use conversion. This paper first aims to report the actuality of people's relations with tidal flats, being converted into the dry land, through description of people's knowledge of shellfish.

In analysis of described knowledge, this paper proposes a pair of concepts: core knowledge and peripheral one. The former is knowledge acquired (1) in neighboring ecological spaces, (2) through such continual activities as commercial fishing, subsistence, or recreation, (3) from direct experiences. Therefore, core knowledge reflects natural environment and social interaction, both of which are local phenomena. The peripheral knowledge, on the other hand, are acquired through various means such as observation in distant biotopes rarely visited, conversation with friends from distant places, and mass media including publication and broadcast, etc. This kind of knowledge, rarely shared in local society, is sophisticated according to personal concern. Distinction between the two kinds of knowledge has been rarely considered in social sciences of folk knowledge, which thus have borne little fruit despite the numerous lists of vernacular names. However, only if the researchers become conscious of such distinction, folk–knowledge studies will be able to describe concrete aspects of human–nature interaction.

A report on people's actual reletions with tidal–flat species, which this paper aims to be, not only records disappearing human–nature relationship, but also provides materials for discussions of how tidal flats are to be used. However, researchers of this discipline have difficulties because of ambiguous nature of tidal flat. The elicitation method, applied in this paper, is expected to be of much use in order to clarify human relations with tidal flats, or with ecotone in general.